COBALT-SERIES

前田珠子



天を支える者

いにしえこいうた
古戀唄3

集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた） 3

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄(いにしえこいうた)3

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　古戀唄3

天を支える者　古戀唄3 …… 7

あとがき …… 201



登場人物紹介


フィオーン王子
クランクレイアの兄で
ディエーン王国の
王位継承者。
ギスカリール
ハーリクとも高貴な人々
とも親しい謎の青年。
ハーリク
ガジェスの親友。
実家は土産物屋。

イラスト／明咲トウル

天を支える者

古懸唄（いにしえこいうた）3

18

結局、アマンシールが夜会において、クランクレイアやフィオーンと話すことはなかった。

隣国ルーシアルの柱神の娘と非公認ながら披露目を受けた形になった彼女のそばには、ひとが絶えることがなく、近づくことができなかったのだ。

だから、アマンシールが彼女と親しく話せたのは、次の茶会でのことだった。

ライラーナの淹れてくれたお茶を飲みながら、クランクレイアは式典で着ていた衣装のことを「楽だと言われてたのに、全然楽じゃなかった。二度と着たくない」などと文句を口にした。

「お似合いでしたよ」

と、アマンシールは言ったが――確かにその言葉に嘘はなかったのだが、いつものように動きやすい衣装を身に着けた彼女の姿に、少しだけほっとするものを感じてもいた。

お茶を二杯に焼き菓子を数枚口に運んだところで、クランクレイアが切り出した。

「ジェス、実は庭で綺麗な花を見つけたんだ」

よく見れば、彼女の足元には園芸用の小さなスコップと、空の鉢の入った籠が置いてある。

公式に姿現しの儀をすませても、どうやら彼女は土いじりをやめるつもりはないらしい。

ちらりとライラーナに目を向けると、彼女は少し困った顔で、けれど止めようとはしなかった。

「わかりました。ご一緒しましょう」

うなずいて、彼はクランクレイアの案内のもと、庭に足を運んだ。

それは、当代柱神コーランジュの屋敷にほど近い場所だった。木漏れ日しか射しこ

まないところに、白や黄色の花が咲いていた。
さして太くはない茎に、小さな花が十以上ついて、揺れていた。
葉からして、蘭の一種のようだったが、アマンシールも見たことのない花だった。
ただ、以前読んだ図鑑に、該当するものがあった。
「綺麗だろう？」
問いかけてくるクランクレイアに「はい」とうなずいた後、彼は「おそらく」とつづけた。
「断言はできませんが、これは南の温帯に棲息するエビネ蘭だと思います」
「エビネ蘭……」
アマンシールの言葉を繰り返し、少女は持参した——もちろん、運んだのはアマンシールである——籠に手をのばした。
「鉢に植え替えることはできるか？」
そんなことは専門職に聞いてくれ——と、思わないでもなかったが、よくよく考えれば、このあたりになると、コーランジュの結界のせいで、庭師は入りこめないの

だ。そのことを思い出し、彼は必死に『エビネ蘭』に関する記憶を辿った。

そして出た答えは――。

「無理だと思います。確かこの花は、風通しのよい弱陽の射す場所で見つかると、読んだ覚えがあります。しかし、それは温帯でのこと……このあたりの特殊な条件下から持ち出しても、寒さで枯れてしまうと思いますよ」

しかも、エビネ蘭は春に咲く花だ――これから冬に向かおうとする外の世界に持ち出すのは、どうにも無理だった。

半ば予想はしていたのか、クランクレイアはあからさまには落胆した様子は見せなかった。ただし、それはあくまではっきりと見て取れるほどではない、というもので、親しくつきあうようになって三年が経つアマンシールにははっきりとわかった。

クランクレイアは、籠から手を放し、花のそばにしゃがみこんだ。

そうして、小さな声で、告げた。

「あの方、な……」

あの方というのが、ルーシアルの当代柱神にして、彼女の父親である人物を指して

いることを、アマンシールは疑わなかった。

「はい」

「あの方……明後日には、帰国なさるんだ」

「はい」

「御立場が御立場だから、多分、二度とお目にかかることはないと思う……だから、せめて珍しくて思い出になる綺麗な花をお土産にと思ったんだが……そうか、無理か。ルーシアルはディエーンよりは南に位置するが、温帯ではないもの、な……」

そういうことか、とアマンシールは思った。

恐らく今生の別れとなる実の父に、思い出となる花を、彼女は贈りたいと思ったのだ——すぐに萎れてしまう切り花でなく、毎年花を咲かせる鉢植えの花を。

贈る相手が、精霊に愛された柱神なら、鉢植えの花を枯らすことはないかもしれませんよ——と言いかけ、アマンシールは思い止まった。

クランクレイアの思いがそういうことであるのなら、珍しいからという理由ではなく、もっと別の思いをこめた、違う花がいいのではないかと思ったのだ。

「クランさま、それなら……」

提案を口にしかけたアマンシールを、突然振り返ったクランクレイアが真っ直ぐに見つめてきた。

「あの方、ルーシアルの第二王子だったそうだ」

紫水晶の双眸には、強い意志の光が宿っていた。

「王太子であらせられる兄上の力になるために、ディエーンに留学したのだって」

隣接する国々との交流を深め、さらにはその地の事情に通じるために、有力な王侯貴族の次男や三男が、留学の名目で他国に派遣される例は珍しくない。

「若くお見えになるけれど、それはあの方がすでに神籍に入られたからで、十年以上前も、いまと同じお姿だったのだって」

柱神とは、神の眷属――十年の間に外見に変化が認められなくてもおかしなことはない。

アマンシールは、先日の夜会における光景を思い出した。

クランクレイアのそばにいたふたりの青年は、二十歳前後にしか見えなかった。

「そして、あの方もやっぱりこの庭で迷子になられて……そこで叔母上……あ、母上か。えっと……」

ずっと、母かも知れないと思いつつ、叔母上と呼んできたクランクレイアにとって、そのふたつの言葉は口にしづらいものなのだろう。

「……つまり、この庭で迷われたルーシアルの御方とオルレイジアさまが、偶然出会われたということですね？」

口にしにくい言葉で、わざわざ心に引っかき傷を作る必要などない。

さりげないアマンシールの提案に、クランクレイアはほっとしたようにうなずいた。

「そう……それで、おふたりは親しくなられたそうなんだけど。なんでも突然、あの方に帰国命令が届いたそうなんだ。そのころには、おふたりの心は通い合っていて……だから、あの方はオルレイジアさまに、必ず迎えにくるから、待っていてほしいとおっしゃって、国に戻られたのだと聞いた」

当時、すでにディエーンの国王は、ガッシュマサラから王妃を迎え、王子をふたり

もうけていたが、ルーシアルとガッシュマサラとの間に不穏な空気はなく、ふたりの結婚にも障害はないはずだった。

（でも、それならそうと、帰国前に陛下に話を通してらしたら、あんなことにはならなかったろうに……）

そんなことを思うアマンシールの心中を察したかのように、クランクレイアがつづけた。

「なにもかも、正式に手順を踏んで、非の打ち所のない形でお迎えしたかったのだって。当時あの方は……もちろん、オルレイジアさまに出会われるまでのことだけれど、女性に関して、あまり評判のよろしくないひとだったらしいから」

つまり、女たらしで有名だったというわけだ――ハーリクたちと親しくつきあうようになって以来、アマンシールの語彙は増えていた……貴族内では、あまり感心されない類のものを中心に。

「オルレイジアさまのことを、必ず幸せにするのだと誓ってらして……だから、帰国と同時に、国王である父君に、そのことを話すはずだったそうだ……けれど、挨拶も

そこそこに、次代の柱神さまが誰であるのか見届ける選定者に引き合わされ、ほとんどその場で、次代さまだと決定されてしまった……って」

そこまで話して、クランクレイアは辛そうに唇を噛みしめた。

「わたし……知らなくて」

なにをです？　――とは問わなかった。

「わたし……次代さまが人間のなかから、神宝に選ばれることは知っていたけれど、そうしてひとの身から神のそれに変わっていくのだとは知っていたけれど……」

そのことは、アマンシールもコーランジュから聞かされていた。

その話を聞いたときは、なぜ自分にこんなことを、と思ったのだが、あの神たる女性は、今日という日が来ることを、前もって予見していたのかもしれない。

「はい」

「体の変化は緩やかに、自然に、進んでいくものだとばかり思ってたんだ。まさか、神宝に触れた瞬間意識を失って、眠りつづけるようなことがあるだなんて……思いもしなくて。だから、わたし、あの方に、心ないことを言ってしまった……」

なぜ、神の身となられてすぐに、オルレイジアさまを迎えに来てくださらなかったのですか？　神となられたら、それまで胸に抱いていた想いは消えてしまうのですか――。

そう、問い詰めてしまったらしい。

だが、そんなことは彼女が気に病むことではないのだ、とアマンシールは思った。

確かに、そんな事情があったとは知らなかったが――それでもルーシアル第二王子クアン・クランドの手際は悪すぎた。

（十一年近くも音沙汰なしとは、恋人としても父親としても最低じゃないか）

どこまでもクランクレイア寄りの立場にある、アマンシールの彼に対する点は辛い。

「当然の疑問だと思いますが？」

「違うんだ……」

クランクレイアは何度もかぶりをふった。

「違うんだ、ジェス。あの方は、なにがあろうとオルレイジアさまと添い遂げるつも

りだと、儀式の前に、周囲におっしゃってたんだ……けれど、神宝に触れるなり、意識を失われて、しかもいつまでたっても目覚められないばかりか、仮死状態としか思えない状態が長くつづいたそうなのだ。周囲は慌てて……もしや、すでにこの神宝は、正当な半身すらも、神へと導く力を失ってしまったのではないかと恐れ、惑った挙げ句、あの方を、次代さまとしてではなく、王子の身分のまま、死亡したと発表したらしい……」

それもまた、乱暴な話だと、アマンシールは思った。

暗黒時代に、柱神の半身とも呼べる神宝の半数近くが歪められ、傷つき、失われたことは、公にはされていないが、神殿や国の中枢では暗黙の瞭然の事実として知られている。

因みに、アマンシールがそのことを教えてもらったのは、口の固い父リュシアンドではなく、神学院を卒業したものの、父を手伝うことを選んだ次兄ファバルワースからだった。

優等生のくせに、妙にクセのある性格の主である彼は、在学時期、さまざまな人物

と近づきになっては、有益無益を問わず、相手から情報を引き出すことを趣味にしていたらしいのだ。

貴族の子弟が集まる神学院で、彼は充分すぎるほどその趣味と特技を生かした情報収集に勤しみ、成功したわけだが——それを実際に有効利用している父や兄たちの姿を見ると、肉親ながら恐ろしいひとたちだと思う——そのなかには、高位の神職についている人物の洩らしたものも少なからずあり、アマンシールが聞いたのも、そうした方面からの情報らしかった。

だからこそ、神殿も国も、暗黒時代を乗り切った神宝の扱いには、慎重に慎重を重ねているはずだった。

ルーシアルにとっても、事情は同じはずなのだ。

傷ついた神宝に、本来の半身以外の人間を添わせるなど、もはやあってはならぬこととされている。

だから、選定者が、真実を曲げてクアン・クランドを認めたということはあり得ない。そんなことをして、貴重な神宝が失われることになどなれば、ルーシアルは世界

中からの非難の的となってしまう。

だが、すでに取り返しがつかないまでに傷ついた神宝が、すでに存在していたとしても、結果は同じだ。

周囲は必ず、選定者とルーシアルの不正を、まず疑ってくる。

(それをかわすために……次代認定の儀式を隠して、クアン・クランド殿下の死亡だけを発表した……?)

世界の空を支える者たちのことは、神の領域であるはずなのに、ひとはたやすくその禁を破る。

政治の世界は、やはり生臭い。好きにはなれない、と心から思った。

「……当然、その訃報を、オルレイジアさまもお聞きになったのでしょうね」

口調は知らず、沈鬱なものになった。

「うん」

と、クランクレイアは小さくうなずいた。

「わたし、そのときのことを想像してみたんだ……。必ず迎えにくると、約束してく

れた恋人が亡くなったと知らせを受けて、でもそのときには、お腹には子供が宿って……なあ、ジェス。わたし、わたしなあ……」

不幸な巡り合わせのために、物心ついて以来、悪意や好奇心に晒されつづけてきた少女は、しかしこのとき、なぜか嬉しそうな顔をしていた。

「そのことを考えたとき、初めて、オルレイジアさまが、お腹の子供の父親について、一言も明かされなかったのか……ちょっとだけ、わかったような気がしたんだ」

最初の沈黙は、きっと迎えにくるからという約束のため。

けれど、恋人の訃報を耳にした以降のそれは、まぎれもない彼女の意志だ。

もしかしたら、「必ず迎えにくる」と言われ、恋人を送り出した当時は、彼女も親しい周囲に恋人が何者なのか、打ち明けていたかもしれない。

けれど、そのひとが二度と迎えにきてくれないのだと知ったとき、オルレイジアは以前とは違う種類の、けれど以前以上に固い決意を胸に抱いたのではないだろうか。

元々体の弱い王女として知られていた。

蜉蝣とは、子を産めばすぐに命を終える儚く美しい虫だ。

その異名を持つ彼女が身ごもったその子供の父親が、すでにこの世の者でないことが知れてしまったら？

彼女を愛する周囲はどんな判断を下すだろう？

そのことを、彼女はしっかりと見抜いていた。だからこそ、沈黙を守り……そして、信頼されて事情を打ち明けられた者たちも、決して口を割らなかったのだろう。

そして……そこまでの彼女たちの頑張りがなければ、クランクレイアがこの世に誕生することはなかったのだ。

「オルレイジアさまは……どうしても宿った子を……わたしを、この世に産み出したかったんだな。皆、そのことを感じたから、誰もなにも言わずに……」

つぶやく少女の紫の双眸からは、悲しみや嘆きではない涙が、はらはらとこぼれ落ちていた。

「そのことを感じたとき、わたしは嬉しくて……でも、同時に申し訳なくて……」

不義の子、醜聞の子――と噂されたことに、心を痛めたことを言っているのに違いなかった。

オルレイジアの心も知らず、そんな噂に煩わされた自分自身を、彼女は責めているのだ。

罪の在所なら別にある。

不用意にも、彼女の耳に届くような場所で、自らの好奇心を満たすために、噂話に興じていた者たちこそが責められるべきではないか。

いまは王宮を去った、そうした問題ありーな侍女や女官数名の顔を思い出しながら、アマンシールは歯ぎしりしたい思いを噛みしめた。

彼女たちは、監督役にあたるライラーナの報告と、フィオーン王太子による進言で、王宮を後にして久しい。

アマンシールは最後の悪戯として、前述のふたりの協力を得て、ちょっとしたことをやったわけなのだが……。

（衣装棚に大ミミズを放りこんでおくぐらいのことで勘弁してやるんじゃなかったな）

女性の親指ほども太い、子供の足ぐらいに長い大ミミズは、見つけられた途端、屋

敷中を震わせるほどの悲鳴を大量発生させた代物なのだが、それでも甘いと思うあたり、アマンシールは実は執念深いのかもしれない。

だが、アマンシールはクランクレイアの前にあっては、どこまでもやさしい彼女の庇護者だった。

「オルレイジアさまはきっと、無事にそのお腹のなかの子が、健やかに成長されることだけを祈ってらしたのだと思いますよ？」

あなたはその望み通りに成長なさったのですから、気に病むことなどひとつもありません。

そこまで告げたとき、だ。

アマンシールは、ひとつのことに気づいた。

クランクレイアが、実の父親であるひとのことを、一度も『父』と呼ばなかったことに、である。

けれど、そのことを問う気にはなれなかった。

たとえどんな事情があろうとも、父親が不在であったため、オルレイジアもクラン

クレイアも、無責任且つ遠慮のない噂の的に晒されつづけてきたのだ。
恨みに思うなという方が、虫の良すぎる言い分というものだ。
このとき、アマンシールはよほど深刻な顔をしていたらしい。
気づいたのは、クランクレイアの小さく細い指で、眉間近くをつん、と突かれた瞬間のことだったが。
「なにを、らしくもない深刻な顔をしておる？　そなたまで、わたしを悲劇の姫君扱いする気なのか？」
「いいえ、そんなつもりは！」
出会って以来、彼女をそんな風に見たことは一度もなかった。
彼女はいつも、出生など感じさせないほどに眩く、輝かしく……ときたま、手を差し出さずにはいられないほど頼りなく、脆く見える――つまりは、当たり前の人間の女の子でしかなかった。
「なら、そんな目で見るな、馬鹿者」
叱りつけられ、困惑した。

そんな目で見るな、と言われても、自分がどんな目で彼女を見ていたのか覚えていないのだ——約束しようがない。

（うーん？）

困惑しているアマンシールをよそに、クランクレイアは言いたいことを言いだした。

「わたしはな、事実を受け入れる用意がないわけではないんだ。ルーシアルの御方が実の父上なのだと……頭ではわかっているし、恨みとか、そうしたもので認めたくないとか、思っているわけではないんだ」

ただ——。

と、紫の双眸に複雑そうな色をたたえて、彼女は息をついた。

「物心がついて以来、わたしにとっての父上は、陛下ただおひとりだったのだ。皇后陛下や二の兄上に厭われていることを感じても……わたしにとっては、陛下が父上なんだって……思って、思えて……だって、わたしを抱き上げて、抱きしめてくれた最初の記憶は、陛下……父上だったんだ……！」



そのときのことだった。

思いがけない場所から拍手の音が聞こえてきたのは。

「まさしく、まさしく」

声の主はディエーンの王太子フィオーンのものだった。

19

「フィオーンさま……」

「兄上！」

アマンシールとクランクレイアは、ほとんど同時に声を上げた。

王太子である彼は、コーランジュの屋敷への出入りを許されてはいたが、ここはその道からは外れた場所だったのだ。

どうしてここに――との思いが顔に出たのだろう。

今年十六歳になった少年は、小さく肩をすくめた。

「もちろん、当代さまにお尋ねしたんだよ。生憎（あいにく）わたしは千里眼（せんりがん）でも、精霊の言葉がわかるわけでもないからね」

そして、真っ直ぐにクランクレイアを見つめた。
「クラン、父上が呼んでらっしゃる。行っておいで……それで、いま言ったことをもう一度、今度は父上の前で繰り返してあげるといい」
「父上に……ですか？」
問い返した少女は、しかしなにやらもじもじとして、即答しなかった。
面と向かって言うのは、気恥ずかしいのかもしれない。
「言っておあげ。父上の、ここのところの落ち込みぶりは、深刻だからね。いまは少し落ち着かれたようだけど、ルーシアルの御方が君を連れて帰国すると言い出すんじゃないかと、ずいぶん心配なされてた」
この言葉に、クランクレイアははっと息を呑んだ。
「そんな……！」
「そう」
と、フィオーンがうなずく。
「それはないと納得されたんだけど、ねえ……今度は、君が本当は御方と一緒に行き

たいと思ってるんじゃないかと不安に思われて……」
「そんなこと、思ってません！　わたしにとって故郷はここで、父上だと思っているのも……」
　言い募る彼女に、フィオーンはやさしく微笑みかけた。
「わかっているよ。父上も、本当はわかってらっしゃるはずなんだが……それでも、言葉にして言ってもらえたら、きっともっと安心なさることだろう。あんな父上は、見るに忍びなくてね……だから、言ってあげておくれ」
　穏やかな兄の言葉に、クランクレイアは「はい」と応じ、踵を返そうとしたところで、アマンシールを見つめた。
「あの、ジェス……」
「気になさらず。フィオーンさまの仰る通りだと思いますよ。籠はわたしが持ち帰りますから」
　笑顔で告げたのだが――彼女の懸念は違うところにあったらしい。
「でも……ひとりで大丈夫か？」

（し、心配なのは、おれが迷子になることなのか――っっ!?）

確かに、出会ったとき、アマンシールはこの庭で迷っていた――その後、自由に歩くことを許されてからも、二、三度……いや、五、六度……そういえば、捜しに行ったはずのクランクレイアに逆に見つけてもらったことも――。

記憶が甦れば甦る分、とても「大丈夫」という言葉に説得力があるとは思えなくなって、正直穴を掘って埋まりたくなってしまった。

ブフッ、と吹き出す音をたてたのは、言うまでもなくフィオーンだった。

睨んでやりたいとは思ったが、こんな状況では効果があるはずもない。耳まで熱くなっている自分の顔が、恐らく真っ赤に染まっていることを、アマンシールは自覚していたのだから。

「ジェス……？」

思いやりに満ちた、クランクレイアの呼びかけがいたたまれなかった。

そんな彼を救ってくれたのは、羞恥の極みに追い込んでくれた張本人だった。

「大丈夫だよ、クラン。わたしが一緒にいるからね。当代さまのお屋敷のある方向ぐ

らいはわたしにもわかるから、そうしたら案内をつけていただいて、ふたりで戻れるから、ね？」

フィオーンの言葉に、クランクレイアは素直にうなずいた。

この、信用度――それとも、信頼度なのか――の違いは大きすぎた。

「……では、失礼します！」

弾む声を残して、少女は裾を翻して掛け出して行った。

その鮮やかで迷いのない足どり――風のように軽やかに遠ざかる小さな背中。

そう言えば、初めて目にするものだったと、悟った。

彼女はいつも、そばを歩いてくれていたのだ。満面の笑顔で、兄に駆け寄る背中をアマンシールにさらしたのも、自分が迷子になる心配のない王宮近くの庭園内でのこと。

（おれは……四つも年下の女の子に、迷子にならないか、いつも心配をかけていたのか）

それは、彼にとっては少なからぬ衝撃をもたらす認識だった。

守りたいと思い、完全ではなくとも、その立場を許されていたと思っていたのに……逆に心配される立場だったとは。

（これじゃ、まるっきり、勘違いの道化じゃないか！）

しかも、それが明らかに露呈された場面を、以前「守ります」と言い切った相手に目撃されてしまった。

恥の上塗りというものだ。

（ああ、もう、フィオーンさまの顔が見られない……！）

羞恥のあまり、顔を伏せていたアマンシールの耳に、心底から驚いたようなフィオーンの声が飛びこんできたのは、次の瞬間だった。

「……信じられない」

意味がわからないアマンシールは、フィオーンから顔を背けたままだった。

しかし、そんな彼にフィオーンは問いかけてきた。

「いったい、どんな魔法を使ったんだい？」

と――。

「はい？」
とアマンシールは振り向きざま声を返していた。
（しまった！　きっと笑われる！）
そんな彼の予想に反して、ぶつかったフィオーンの眼差しに、揶揄するような光は見いだせなかった。
けれど、その代わりに、強い、強い問いかけてくる意志を感じた。
「わたしは、なにも……」
息がつまる。
支配者の瞳で見つめられるだけで、普通に呼吸することさえできない。
「魔法だなんて……」
わたしに使えるはずがないじゃありませんか！
必死の思いで、ようやくそれだけの言葉を喉から絞り出した瞬間、フィオーンの眼差しがふわりと和らいだ。
その途端、全身を縛る力が霧散する。

この、有無を言わせず相手を屈伏させる気迫――これこそが魔法と呼ぶにふさわしい力ではないのか、とアマンシールは思った。

そんな彼に、説明が必要だと思ったのか、フィオーンが口を開いた。

「クランは……あの子はねえ、どんなに私たちが口を酸っぱくして言い聞かせても、急ぐとなるとそんなことはきれいに忘れて、風霊たちの力を借りて、空を飛んで移動したものだ。ところが、この状況で、驚くじゃないか、彼女は自分の足で走って王宮に戻って行ったんだ。私たちの誰でもないとしたら、魔法をかけたのはお前しか考えられないだろう？」

納得できたら白状しなさい――と言わんばかりのフィオーンの笑顔の迫力に、アマンシールは思わず身を退きかけた。

「そんな……本当に、心当たりなんて……」

と、答えている最中に、引っかかるものを思い出した。

あれは……初夏のころ。誕生月を控えた週末の茶会でのことだった。

「……そういえば、わたしの誕生月が六の月だとお知りになったクランさまが、なに

か欲しいものはないのかとお尋ねになられたことがあって、そのときにそのようなことをお願いしたような気が……」

風習として、ひとは新年を迎える毎に、一緒にひとつ歳を取るというものが一般的なのだが、大切な子供が生まれた時期を、なかったものにしたくないという思いは、ほとんどの親が考えることらしく、その子が生まれた季節、あるいは月、あるいは週、さらには日にまでこだわり、祝いたがるものなのだ。

当然、暦に対する知識を持ち合わせた上流階級の者ほど、その傾向は強い。

王家の一員として生を受けたクランクレイアはもちろんのこと、ディエーン屈指の名門ファラスース家に生まれたアマンシールも同じだった。

だが、アマンシールの場合、経験豊かな産婆が予告したより一月近く早くに生まれたという事情があった。

こうした事情で生まれてきた子供は、『本当に生まれた日がわからない子供』として扱われる。早産などめずらしいことではないと、理性的に判断できる家族のなかに生まれたアマンシールは、幸福だったといえよう。

ただ、そうではあっても、彼の戸籍には、彼の生年月までしか記されない。だから、祝うことができるのは誕生月までなのだ。

その事情を詳らかに説明したことはなかったが、彼以上に複雑な事情を抱え、しかもそのことを表に出すことなく胸に抱えてきた少女は、「誕生月」という言葉を、アマンシールが用いた時点で、なにかを感じ取ったのだろう……それ以上追及することはなかった。

本当に、やさしい少女なのだと、そのとき改めて思った。

不幸を知らなければ、真実幸福をかみ締めることはできないのだと、なにかの本で読んだことがあったが、半分は間違っていると思った。

大切なのは、痛みを知る心と、想像する……できることだ。

そして、そこに心を添わせる——到底できないこともあるだろうが、そうするべく心を砕くことが、なにより大切なことなのだと、そのときアマンシールは思ったのだ。

そのことを、恐らく心でわかっているに違いない少女の、改めて繰り返された「な

にか欲しいものはないか？　なんなら、わたしにしてほしいことでもいいぞ？」という言葉に、返した願いは……彼女自身の安全に関わることだったのだ。

地上からは仰ぎ見ることしかできない高い、高い空の上を、風霊に守られて飛翔するクランクレイアの美しさは何度も目にしていた。

けれど、その姿を目にする度、初めて出会ったときの墜落事件が脳裏に甦り、どうしても素直に賛美することができなかった。

もし、あの高さから落ちたら――と思うと、背筋に冷たい汗が流れるのを止められなかったのだ。

だからアマンシールも、彼女を慈しみ、大切にしている周囲の人間同様、何度となく空の散策は控えるように言ったのだが、これも他と同じく煙たがられるだけの結果を招いていた。

ただ、あのときは、不思議にこちらの心が通じるような気がして……それで思わず、願いを口にしてしまったのだけれど。

（あの後、他に欲しいものはないのか、とか、他にして欲しいことはないのか……と

か仰らずに、不機嫌そうに黙りこまれたものだから、なんだか曖昧なままになってしまったんだよな、そう言えば……もしかしたら、わたしの頼みをきいて下さったんだろうか……？）

今更ながらに思い当たった事実に、戸惑うアマンシールに、フィオーンは冷静に「きっと、それだな」と言い切った。

そして、深い、深い、ため息をひとつ洩らした。

「呆れたな。知り合って、三年にもなるというのに、そんなことも話してなかったのか」

心底呆れ返ったと言わんばかりのフィオーンの言葉に、アマンシールは眉をひそめ、反論した。

「むやみに立ち入っていい話じゃないじゃありませんか！　それに、あの方にとって、特別な力を揮うことは、意味のあることだったのですから……」

そう、『女神の産みし娘』という対外的な評判――足場を、しっかりと固めるためにも。

周囲の制止を振り切り、奇跡を人の目に触れるところで繰り返していた裏には、ここにいてもいいのだという安心感が欲しいという思いがあったのではないか、とアマンシールは思うのだ。

もっとも、こんなことは言うまでもなく、フィオーンはわかっているのだろうが……。

はたして、王太子は「そうだな」と短く応じた。

そのまま、なにか考えこんだ年長の少年は、しかし突然がらりと話題を変えてきた。

「そう言えば、先日の夜会では、こちらからわざわざ呼び出しておきながら、ゆっくり話すこともできなくて悪いことをした」

脈絡が全然摑めなかったが、謝られるようなことではないとアマンシールは思っていたから、すぐに「いいえ」と返した。

実のところ、イモ洗いもかくやという状態で、国内外の貴族の面々がクランクレイアを取り囲んでいるのを目にしたとき、あのなかに呼ばれたらどうしよう——と不安

に思ったぐらいだったのだ。

なにしろ、自分はまだ、正式にデビューを果たしていない半人前なのだ。

間違っても、そんな面々のなかに混ざりたいとは思わなかった。そんなことになろうものなら、少なくとも国内の貴族の間では、成人前のファラスース家の子息がなぜ——という話題が盛り上がるに違いないことぐらいはわかっていたからだ。

だから、国王やフィオーンが、特にあの場で呼びつけるようなことがなかった事実に安堵を覚えると同時に、（これはきっと、親しくしているわたしに、クランさまの晴れ姿を見せてやりたいというお心に違いない……）と、勝手に納得していたのだが——。

もしかしたら、違ったのだろうか？

なんだか胸がざわめくのを感じた。

しかし、すぐに、そんなはずがあるわけがないと思い直し、アマンシールは努めて明るくこう言った。

「あんな注目度満点の場で、呼ばれたりしたら、きっとあらぬ噂の的になってたに違

いないですから、却ってありがたかったくらいです」

と。

「そうだな」

と、フィオーンも同意するようにうなずいた。

やはり、そういうあたりに気を使って下さったのだと、感謝の念を抱いたのもつかの間のこと——十六歳の王太子は、さらりと聞き捨てならないことを口にして下さった。

「そう……詳しい事情を知らない国外の客人はともかく、ああまで厚顔無恥なやからが大挙して押し寄せるのは予想外だったな」

しかも、いつの間にかわたしの配下にまで手をのばしていたとは。

つぶやくような低い声には、まぎれもない怒りが宿っていた。

人当たりのよい、頼もしく気安く付き合える王太子という仮面を外したフィオーンの姿がそこにあった。

彼の他を圧倒する存在感は、過去何度か目にして来、見知ったものだと思っていた

のだが、どうやらそうではないらしかった。

（このひとが……なんだか恐ろしい……）

感じた直感の正しさを証明するかのように、フィオーンはにこやかな笑みを絶やさずに、こう続けたのだ。

「あんなお邪魔虫たちが大量発生しなかったらね。わたしも父上も、君をクランのそばに呼びつけて、周りに見せ付けるつもり満々だったんだよ」

と――。

その言葉の意味するところを理解した瞬間、アマンシールは呆然とした。

神の娘と公認されたクランクレイア――その彼女の周囲を取り囲んでいた、国内の有力貴族たち。

彼らの思惑が奈辺にあるのか、気づかないほどアマンシールも疎くはなかった。

そんな貴族たちを『厚顔無恥なやから』、『お邪魔虫』と称するということは……。

秋とはいえ、まだ朝夕を除けば肌寒さを感じるほどではない時期にも関わらず、アマンシールは背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「ご冗談でしょう……？」

たったそれだけの言葉を紡ぐのに、大変な努力を要した——舌が口内に張り付いて、うまく動いてくれなかったのだ。

そして、王太子たる少年は、彼にかわして逃げることも許さなかったのだ。

「なぜ、冗談だなどと思うんだ？　お前はファラスース家の嫡出子で、あの子とは三年以上のつきあいになる。なにより重要なことは、あの子がお前を信頼し、慕っていることだ。なにか問題があるか？」

この件に於いて、相手が自分を攻め落とす気満々なことは明白だった。

「ク、クランさまはっっ！　まだ十歳ではありませんか！」

アマンシールの必死の抵抗は、しかし政略結婚に近しく、また詳しいフィオーンには意味を持たなかった。

「その幼いクランに、三十路過ぎの男が、大まじめに結婚を申し込んでくるんだ。もちろん、あの子を真実思っての申し出ではない。まあ、本気なら本気で、相手の性的嗜好を疑わざるを得ないわけだが……そんなやからほど、強気で押してくるのだから

タチが悪い。わたしも父上も、あの子にはなんとしても幸せな結婚をしてほしいんだ。その相手として、お前ほど相応しい人物はいないと思ったんだが……迷惑か？」

フィオーンの決断には、まぎれもないクランクレイアへの愛情が溢れていたが、同時に彼女の自由意志を無視する方向性を持っていた。

本人ではなく、保護者がその伴侶を決めることなど、珍しくないどころかあまりにも一般的なことだから、フィオーンも国王も、なんの疑問も感じていないに違いない。

けれど……アマンシールは、それは違うと感じてしまったのだ。

精霊と語らうクランクレイアは、おそらく世の姫君たちとは全然違う心のあり方を確立しているに違いないのだ。

心に刺さっていた棘が消えた今、彼女は当たり前の王侯貴族の令嬢のように、保護者の言いなりになって、婚姻を受け入れることはあり得ないと思うのだ。

「わたしは……恐れ多いことながら、あの方を妹のように愛しく思っておりますし、あの方もまた、わたしを甘えられる兄のように思ってらっしゃるだけかと存じます。

しかるべき時期が訪れましたら、彼女は自らの意志で生涯の伴侶となる相手を選ばれましょう……」

その前に、周囲があれこれ画策するのは無意味だと、そう言いたかったアマンシールだが、フィオーンはその説に納得してはくれなかった。

「お前のいいたいこともわかる。だが、世の中の大半の人間は、お前やわたしたちほど、あの子のことを知らない上に、あの子を普通の娘だと認識してるんだ……要するに、神の娘としての不思議な力を持つとはいえ、国王陛下のお言葉には、一も二もなく従うに違いないのだ、とね。そうしたやからは、熱心な上に諦めが悪い。すべてはクランの心のまま、などと言ったが最後、どんな手段にでるかもしれない危険性がある」

フィオーンが暗示した可能性は、アマンシールの背筋を凍らせるに充分な脅威を持っていた。

「……まさか、そこまで……」

「これまでのあの子なら、その心配は無用だったが……公に民に姿を顕してしまっ

た以上、王宮の外に出ざるを得ない事態も生じてくる。公式の行事で外出したときに、襲われた挙げ句、攫われたりしたとしたら……彼女にまつわる醜聞を回避するためだけに、こちらは応じるしかない状態に陥りかねないとも限らない」

告げられた内容を、アマンシールは彼なりに吟味した。

そうして――導き出した結論は、と言えば。

「わたしはクラン様の対外的価値が上がったと思っている勘違い独身貴族への重石兼当て馬ですか！」

ぽん、と手を打って、アマンシールは一番納得のいく結論に、うんうん、とうなずいた。

（確かに、婚約とまではいかないものの、相当親しい間柄にある人間がいるという理由をつければ、縁談だって断りやすいに違いないもんな……）

すっかり、そうだと思いこんでしまったアマンシールは、「そういう事情なら、いくらでも当て馬に使ってくれても結構です」と言い放ち、そのときばかりは偶然の天からの指針を受け、奇跡的偶然の果てに、コーランジュの屋敷のある方向へ、すたす



たと歩き去ってしまったわけだが。

取り残された格好になったフィオーンは、なんとも言い難い思いを抱えて空を見上げた。

大樹の枝葉の間から、射し込む陽光に目を細めつつ、彼は深刻な息をついた。

「あれだけ、説明したというのに……なぜ、当て馬なんだ？　なんで自分が本命だと思わないわけだ？」

名門ファラスース家の息子にして、クランクレイア自らが話し相手にと願い、それを国王も王太子である自分も認めた存在なのだ、彼は。

当然、将来の展望についてもわかっていてしかるべきだと、自分などは信じて疑わなかったわけだが……。

（まさか、本当にわかっていなかったとは……頭の回転悪くないはずなのに……あれも一種浮世離れしているというやつなのか……？）

はてさて、この先どうしたものか――。

しばし考えこんだ後、フィオーンはアマンシールの申し出を受けることにした。

伝えるべきことはすでに伝えた。
それでも事態が動かないということは、まだ期が熟していないということだろう、と彼は冷静に判断したのだ。
（願わくば……まだ事態が安定しているうちに、二人が心を通わせてくれんことを……）
滅多にないことだったが、不運な巡り合わせで生まれた義妹の幸福のために、フィオーンはそう祈らずにはいられなかった。
激動の時代の到来を、彼はすでに確信していたのだ……。

20

寮に届いた手紙のなかに、見覚えのない筆跡の、しかしまぎれもなく自分宛の封書を見つけたとき、アマンシールは思わず首をかしげた。

なぜなら、それは家族から送られてくるのと同じ扱いの包みに入れられていたからだ。

王立学院の寮生は、かなり厳しく外部からの書簡に干渉を受ける。

その卒業生の多くが、王宮において雇用される事情を鑑みるだに、無理はないかもしれないが、青田買いならぬ青田買いを試みる輩が後を絶たないのだ。

用心するに越したことはない。

だが、その問題の書簡は、受け取った本人さえわけがわからないほどに尊重されて

いた。
蜜蠟印に、はがされた痕跡は一切見受けられず、しかも受け取るに際して、事務所から質問を受けることもなかった。
まず、あり得ないことだった。
（なんだよ、一体？）
ひらりと裏返し、差出人の署名を見る。
住所はなし――さすがに名前だけは書いてあったが、覚えのあるものではなかった。
（アラウィア・ファヴァイナ……？　聞いたこともない……）
そんな相手から手紙が届くとは、いったいどうしたわけだろう？
君子危うきに近寄らず――を実践し、このまま知らんふりを通そうかとも思ったが、もし先日のフィオーンの話と関係があるようであったら、無視するのはまずい気もした。
クランクレイアを守るためなら、当て馬扱いされてもいいと、彼は自分から言い放

ったのだから。

（クランさまとの結婚を願う求婚者本人か、それとも、それを後押しする気満々の親兄弟か親族の誰かか……）

だとしたら、きっと手紙の内容は、自分とクランクレイアの関係を問うものに違いない――と、アマンシールは思った。

そうでなかったとしたら、どこかに呼びつけて、真実を聞き出そうとするもの――。

果たして、封書の中身は、呼び出しの文書だった。

週末の休日の午後一番に、ロスタロイド東地区にある喫茶中心の店で待っている――と、簡潔にそう記されていた。

面倒はイヤだな、と実は真っ先に考えた。

けれど、クランクレイア絡みとなったら、話は大きく違ってくる。

彼女のためなら、可能な限りの努力を惜しまず、全力を尽くす覚悟はある。

相手の正体がわからないうちは対応策も用意できない。

行くしかない……、とアマンシールは心を決めた。
もしも未来を見通す力を彼が持っていたら、そこまでの決意を固めることもなかっただろうが……いかんせん、彼にはそれだけの力がなかった。
神ならぬ身は、そのときそのとき、最善と信じる道を選択することしかできないのだ。

指定された店で見つけたのは、意外にも見覚えのある人物だった。
「……ギスカリールさん……？」
アマンシールが店に入るなり、手を挙げたのは、王立学院の同級生で、寮でも同室の友人ハーリクを介して知り合った青年だった。
土産物屋（みやげ）を経営するハーリクの父親が連れてきて知り合ったという話だが、どうも一筋縄（ひとすじなわ）ではいかない人物に思えて仕方ない——と、アマンシールは考えている。

なぜなら、彼は先日の豊穣祭の王室主催の夜会に、クランクレイアの実父であるルーシアルの当代柱神とともに出席しているのを、彼がその目で見たからだ。

神殿関係に詳しい次兄ファバルワースの口からも、彼が他国の柱神の縁者であることは聞いていた。

縁者とはいっても、柱神も元々は人間だったわけだから、特別な異能を持ち合わせているとは限らない——事実、後に柱神になった人物の子供のほとんどは、多少勘がいいぐらいで、クランクレイアのような例は滅多にないのだと次兄は告げたものだ。

だから、他国の柱神の縁者とはいえ、普通の人間であるギスカリールが、ディエーンを訪れたことは、なにもおかしくはない。

その向けるところの興味が、銅版画の技術更新だったとしても、大貴族の息子のくせに、博物学に人生のすべてを捧げたいと思っているアマンシールには、ありえないとは言い切れないものがある。

だが、それでも引っかかるものを覚えてしまうのも、また事実だ。

なぜなら、彼はハーリクを介して知り合ったその日に、無視できない言葉をアマン

シールに投げつけてきたのだ。

『君という人間を見る必要があった』

こちらを不安に陥れたくせに、その反応を試していたことをあっさりと認めたあげくの、罪悪感のかけらもない言い訳――。

自分が未熟でかなわなかった悔しさ以上に、手持ちの札があることを示しながら、見せようとしない態度にいらついた。

余裕綽々すぎる態度に、心底からの苛立ちを覚えた。

しかも、今回の偽名を用いての、呼び出し――ときたら。

「……いったい、何のおつもりです？」

煮詰まったアマンシールの声音は、実は結構迫力があった。

しかし、いいように踊らされているとしか思っていない彼自身は、自分の醸し出す雰囲気に無頓着なままだった。

「偽名まで使って、わたしを呼び出されたのには、一体どんな理由があるというのです？」

しかし――。

氷結状態のアマンシールの精神状態を前にしても、呼び出した主は平常心を失わぬ器量の主だったのだ。

「それは、勿論、ほかの邪魔を入れずに君と話し合いたかったからだが……ひとつだけ、訂正しよう。わたしは偽名など用いてはいないよ。アラウィアもギスカリールも、等しくわたしに与えられた名だ。もちろん、ファヴァイナという家名もね……まあ、君と話すにあたって、前もって余計な知恵をつけてほしくなかったのは確かだがね」

それはつまり、ハーリクなり次兄なりから、情報を得ることを警戒したということだろうか――そして、そのことを望ましく思わなかった、と……？

なにやらきな臭い、とアマンシールは思った。

理性的に考えるなら、ギスカリールのやりようは誠実とは言い難く、すぐに席を立ったところで非難されることはない――だが、彼がそう思われることを承知の上で、このような呼び出しをした挙げ句、話そうとするその内容に興味を覚えた。

それに……クランクレイアの晴れ姿を、心底嬉しそうに見つめていた彼のことを、疑いたくないという思いもあったのだ。

「……わかりません。なぜ、こんな試すような真似を……？」

尋ねたアマンシールに、ギスカリールははっきりと答えた。

「まさに、試しているからだよ」

思いがけない言葉に、アマンシールはどう反応していいのかわからなかった。

そんな彼に、ギスカリールは告げた。

「クアンは幼いころからの友人でね。彼が突然の帰国命令をうけ、ルーシアルに戻ることになったとき、くれぐれもと頼まれたのは、彼の思い人であるオルレイジア殿下のことだった。彼女の幸福をどうか見守ってほしいと……もし、自分の目覚めが遅すぎるようだったら、彼女自身が幸福になれる最善の道を探してほしいと……言ったんだよ」

もっとも、わたしとしては、そうならないことを祈っていたんだがね。

そう言うギスカリールの顔を見ながら、アマンシールは不思議な思いを味わってい

た。

ルーシアルの柱神となったクアン・クランドは十年もの間、意識を失い眠りつづけていたという。当時すでに二十歳をすぎていた彼は、当たり前の人間なら、三十を超えているわけで——神の眷属となった今、外見がほとんど変わらないため、同年配にしか見えないギスカリールとの年齢差をうっかり見落としそうになるのだが——単純に計算すれば、ギスカリールは十歳前後でそのことを頼まれたことになる。

いくら相手が柱神の縁者であるとはいえ、二十歳を超えた青年が、そんな子供に恋人のことを頼んだりするものだろうか？

（それともこのひと、若く見えるだけで、実年齢は結構高い、とか……？）

童顔のせいで、実際より幼く見られる知り合いはいないでもないが、どうも系統が違っているように思える。

そんな彼の疑問に気づいたのだろう、ギスカリールは軽く肩をすくめた。

「特殊な例だが、わたしの祖先は、神籍に入られて後、子をなされた。以来、たまに普通より成長も老化もゆっくりした……まあ、寿命も長い子供が生まれるようになっ

たという話だ。下手にごまかしたら、却って疑念を抱かれそうなので言っておくが、クアンはわたしより年下だよ」

その説明に、やはりと思った一方、俄には信じがたいという思いがわき上がり、アマンシールは困惑した。

納得できる材料を与えられながら、それでも信じられないという、この心の動きは何なのだろう？　実は自覚していなかっただけで、自分はもしかしたら、融通のきかない石頭だったのだろうか……？

その懸念は、彼の心を揺さぶるには充分すぎる威力を秘めていた。

騙されやすい人間である必要は感じないが、彼が目指す道は、これまで常識があり得ないと断定した物事を、覆し、変え、切り開いていくものなのだ。

なにごとも、『あり得ない』の一言で片付けていては、未来は切り開けない。

（もーしーかーしーてー、おれって、応用力のない馬鹿？）

それは、自身の夢の終わりを意味する。

世界中の人間が、あり得ないと断定しようと、あきらめずに邁進する姿勢と努力こ

そが、新たな発見へと結びつくのだから。

それができないとなったら、研究者としての資質はゼロだ。当然、可能性を求めることなどできはしない。

自らの生まれ持った資質に対し、深い悩みを抱え込んだアマンシールの様子を、ある意味意地悪く、しばらく見守っていたギスカリールが声をかけてきたのは、しばらくしてからのことだった。

「合格だ」

簡潔すぎる言葉は、却って理解するのに時間を要した。

「は？」

「鵜呑みにはせず、かと言って即座に否定にも走らない……君の反応は、合格レベルだと言ったんだよ」

またしても、試されたのか――。

口惜しさに、思わず拳を握ってしまったが、それ以上に知りたいことが出てきた。

なぜ、ギスカリールはここまで自分を試すのか――ということだ。

一度ならわかる。だが、切り札の一部を明かしておきながら、同時に試すための手も打ってくるというのは……かなりの高等技術のはずだった。

それだけのことを、なぜ、父や兄たちでなく自分に仕掛けてくるのか。

思い当たる理由は、生まれてきてからずっと見守ってきた、クランクレイアへの愛情ぐらいしかなかったが、ここまで意地悪い質問を浴びせかけられる理由にはならないはずだ、とアマンシールは思った。

いや、思っていた。

ギスカリールから、この国の奥底で、動き始めようとしている流れを聞くそのときまでは。

「まさか……嘘でしょう……？」

告げられたアマンシールの声は、その時震えていた。

それだけ衝撃的なことだったのだ。

「事実だ」

ギスカリールは事実のみを語り、アマンシールに哀れむような目を向けた。

「コーランジュさまに老化の兆しが見え始めている。ディエーンの柱神の世代交代は、近い」

柱神に関する情報の多くは閉ざされている。

それというのも、広く知られた結果、暗黒時代を招くことになったと識者たちが判断したせいだ——と言われている。

確かに、元々が人間であったという事実、また彼らが決して土地に縛られていないのだということだけでも、利用しようと思う人間が知れば、どう悪用されるかわからない。事実、神の眷属を自分たちに都合よく生み出そうとした人間たちの傲慢の罪ゆえに、暗黒時代は訪れたのだから。

そのことを戒めに、神殿は柱神に関わる情報のほとんどを隠すようになったのだという。

アマンシールはディエーン屈指の名門貴族の家に生まれた上、『女神の産みし娘』――今はルーシアルの柱神の娘だと認知されたわけだが――クランクレイアとの関わりもあったおかげで、かなりの事情に通じてはいるが、それはあくまで例外的なことだった。

現に、王立学院で共に学ぶ友人たちは、柱神とは生まれながらに神の眷属なのだと信じている。

当然のことながら、柱神の交代とほぼ同時期に起こる王家交代との関連性にも気づいてはいない。

アマンシールも、王宮に出入りを許されたり、すっかり神職につくものだと周囲が思いこみ、その気安さで神殿上層部の面々から、様々な情報を引き出した次兄ファバルワースの存在がなかったら、きっと気づくこともなかったろう――正面から向き合うには、それはあまりにも生々しい問題だったのだから。

柱神の交代劇の裏には、常に血なまぐさい問題がつきまとう。

詳細は知らずとも、その事実だけは認識しているアマンシールにとって、ギスカリ

ールの発言内容は、決して聞き捨てにできないものだった。

（当代さまに……コーランジュさまに、老いの兆し……？）

それは、神の眷属として、生まれ変わった柱神にとっての生の終わりの近さを告げるものだ。

現在の柱神であるコーランジュは、五十を超えるかどうかのころに、神の眷属に迎え入れられたと聞いている。

すでに老いの時期にさしかかっていた彼女の肉体は、この二世紀近くというもの、ほとんど変化を見せていなかった——とは、ファバルワースが神殿の長老のひとりから、聞き出した話として教えてくれたことだった。

その彼女の身に、老いの兆しが現れたということは、ギスカリールの言う通り、ディエーンにおける柱神の交代時期の訪れを意味している。

人間の身ほどに、急速な変化はないだろう。

だが、確実にコーランジュの柱神としての命は終わりに近づいている。

そのことの意味するところは——。

（新しい柱神にどなたが選ばれるかにもよるだろうけど……かなりの確率で……）

王朝交代が起こりかねない……。

現在のエルスース家もまた、コーランジュが選ばれた後に開かれた王朝なのだから。

だとしたら……これまでの歴史の流れから考えれば――現王家に生まれた者たちは、少なからぬ命の危険にさらされることになる。歴代の、王朝開闢者たち――ディエーン建国の始祖の血は、ほとんど有力な貴族に受け継がれているため、これまで王朝の交代はあっても、簒奪者と呼ばれる者の出現はなかったのだ――が王位に就くなり実行したことが、前王家に連なる者たちの粛正であったことを考えれば、まず間違いないことだろう。

だとしたら、神の娘と呼ばれているからといって、クランクレイアだけが危険から解放されるわけではない。もちろん、彼女がルーシアルの当代柱神を父に持つ未婚の女性だという条件を考慮に入れれば、命まで狙われるようなことにはならないかもしれない。

だが、もしもそうなったとしたら、彼女は今度は骨の髄まで政略の駒として利用され尽くすことだろう。

あの奔放な少女に、そんな人生を歩ませることなどできはしない。

（だから、なのか……）

ギスカリールの意味深長な言動の意味が、ようやくわかったとアマンシールは思った。

友人に頼まれたとは言え、十年も見守ってきた相手のことを、愛しく思わないはずはない——思いこみではないと、アマンシールは確信していた。そうでなければ、彼の自分に対する挑発的な態度に説明がつかない。

自分を動揺させることによって、彼が引き出そうとしたもの——それは、自分の本音であり、彼女に対する覚悟のほどではなかったろうか。

同時に、なまなかな覚悟で、彼女に関わりつづけるつもりなら、排除するつもり満々だったのかもしれない。

自分の心をさらってみる。



もし、父や兄たちが、新しい王になるかも知れない人物に与することを選んだとしたら？　そうなった時、自分はなにをどう選択するだろうか……？

考えてはみたものの、一向に答えは見いだせなかった。

決定的な情報が欠けていた。

「……では、次代さまの候補はすでに選ばれてらっしゃるんでしょうか？」

尋ねたアマンシールに、ギスカリールはかぶりを振った。

「いや、いまのところ、まだ時期が近づいていないのだろう……次代を半身とする神宝は沈黙したままだ。だが、早晩目覚めるのは間違いない。目覚めれば、すぐに選定者が現れる……猶予は長くて十年、短ければ二、三年というところだ。だから、わたしはなんとしても、君の心の内を聞いておかなければならないと思ったんだ」

「二、三年……」

聞いて、アマンシールは心を決めた。

決して充分とは言えないまでも、時間的猶予はあるのだ……許されているのだ。

あがきに近い努力をすることが。

アマンシールの脳裏に、さまざまなひとの顔が浮かんだ。
大好きなひと、そうでもないひと、絶対に失いたくないひと、仕方ないとあきらめてしまえるひと。
究極の選択を強いられたとき、人間とはかくも残酷になれるのかと思いながら——
それでも彼は一番痛みの小さな道を選びたいと思った。
本当は、誰にも傷ついては欲しくなかったのだけれど……。

21

ギスカリールから話を聞いたものの――確かに猶予はあったものの――自分一人の手には負えない問題だと認識したアマンシールは、真剣に相談する相手を考えた結果、それに自分の父親を選んだ。

ディエーンの次代の柱神がどの家から選ばれるのかは未だわからないとは言え、その兆しがあることを打ち明けておくことに、問題はないと思ったのだ。

果たして――。

ギスカリールから聞いた内容を話したアマンシールに、ファラスース侯爵リュシアンドは気むずかしい顔をしてうなずいた。

「なるほど」

ため息まじりに息子の話を聞き終えた侯爵は、堅く目を瞑った。
「神宝が、未だ眠ったままであることは残念だが……対処するだけの時間が許された時期にこのことを知らされた幸運には感謝しなければなるまいな」
その声音が、魂の奥底から響くようなものであったことに驚きを覚え、アマンシールは思わず「父上？」と問いかけた。
そのときの彼の表情や口調から、なにかを感じ取ったのだろう――リュシアンドは、呆れて言葉もないという顔になった。
「お前の頭は海綿仕立てか？」
興味のあることにはいくらでも活発に活動するものの、眼中外の事象には一切の関心を覚えない自身の頭脳活動に関して、「そう言われても無理ないかも」と半ば以上思うようになって久しいアマンシールは、意気消沈する寸前に、あるひとつの、鍵となる言葉を思い出した。
それは、彼が父に連れられ二度目に、王宮を訪れたときのこと――。
『ファラスースの又従兄弟殿』

と、国王は父のことを呼んでいたのではなかったか。

（ま、又従兄弟って、何代前の祖先が同じ関係なんだっけ……？）

多分……恐らく、三代か四代……けれど、同時にアマンシールは実母が国王の従妹であったことを思い出した。

それは完璧に、王朝が交代する度に繰り返されてきた、三代遡って皆殺しの範疇に、父はともかく、自分たち兄弟が含まれているということではないのか。

つまるところは一蓮托生――。

「ち、父上！」

アマンシールは必死に問いかけた。

「父上も、滅ぼされることを従容と受け入れるおつもりはないわけですよね？」

尋ねた息子に、リュシアンドは不機嫌な面持ちで「当たり前だ」と答えた。

そうして重大情報をもたらした三男坊に、ファラスース家の当主が与えた課題とは――。

『事態の深刻さがわかるのなら、お前も好き嫌いを言わずに励め』

だった。

無論アマンシールに否やはなかったが、これから、その問題に着手するために、どれだけのことを学ばなければいけないのかを考えたとき、少しばかりめまいにも似た感覚を味わったことだけは確かなことだった。

（適材適所で……って、思ってたのに……）

どうやら、それが通じない状況に陥ってしまったらしい。

泣きたくなったアマンシールだった……。

苦手だ、どうにも性に合わないなどと文句を垂れつつも、実際問題としてクランクレイアの件を抱え込んでいる以上、それまでの人生で最高の努力と意欲と忍耐力を発揮して、アマンシールが政治、外交、経済を学んで、三年半――。

大半の者にとっては「たった」としか呼べない時間は、しかし、学ぶ意欲を持つ才

ある者にはそれなりの知識と経験をもたらした。

その結果、アマンシールは家族内に、「次代柱神候補に選ばれた子供を、いっそ、王家の養子にはできないだろうか？」という提案を持ち出すに至ったのだ。

そうすれば、次代に選ばれる子供は王家の子供となる。

ならば、その交代とともに王家までも入れ替わる意味はなくなる。

もっとも、そこに意味を見いだす者の存在と、そうした者たちの思惑に関しては、父侯爵（こうしゃく）と二人の兄が助言してくれた。

みな、今の王権に満足しており、無用の混乱を世に持ち込みたくないと思っていたからだ。

その思いにこそ、アマンシールは感謝の念を抱く。

なぜなら――彼が、柱神交代毎（ごと）の王朝交代劇を是非とも回避したいと思ったその原因とは、実のところ、たったひとつで。

クランクレイアやフィオーンたちを傷つけたくない――その一心だったからだ。

「よっくもそんな突拍子もない提案を侯爵が受け入れたもんだね」

とは、そろそろつきあいも四年になんなんとするギスカリールの言である。

祖先が柱神となってからその血を受け継ぐ子供として生まれたせい、という彼の言葉通り、知り合って以来、その外見的特徴に変化はない。相変わらず、彼の容姿は二十歳前後のままで、もうすぐ一八になるアマンシールと並んでいても、なんの違和感もなくなっている。

「突拍子もない……って。おれはおれなりに考えたわけなんですけど……」

どうしたら、遠くない未来にあって避けようのない柱神交代劇において、過去繰り返されてきた流血の惨事を免れられるのか……必死に考えて考えた結果を、こんな風に呆れられるのは切ないものがあった。

「そんな顔をするもんじゃない。おれはお前のその発想力にも、それを大まじめに受け入れ、実現化しようっていう侯爵の度量にも、本気で感心してるんだからな」

外見だけ見れば、どこからどう見ても上流社会出身にしか見えない青年は、しかし場所によっていくらでも雰囲気を変えられる。

おかげで、ロスタロイドの下町の飲み屋兼食堂にあっても、浮いているのはアマンシールのほうだった。

もちろん、会うにあたっての場所を指定してきたのはギスカリールだ。

淡い金髪に整った繊細な顔立ちの美青年など、目立ちまくって仕方ないはずの彼は、しかしなぜだか周囲にとけ込み、好奇心たっぷりの視線をもっぱら送られるのは自分ひとりというのだから、クランクレイアの例を挙げずとも（やはり、柱神さまの血脈に連なる人には、特別な力が備わるものなんだろうか？）と思わずにいられない。

「本当に、そう思って下さってるんなら、呼び出す場所をもう少しどうにかしてくださいよ」

渋面で文句をつけたアマンシールに、ギスカリールは「おや」と言いたげに眉を上げた。

「ひとが多くて、猥雑で、盗み聞きされる心配が少ない……いい場所だと思うんだけどねえ？　少なくとも、もっと上品な、どこの有力者に買収されてるかもしれない店や宿なんかよりは信頼度は高いと思うけど？」

それは……まあ、確かにその通りだった。

父や兄たちに全面的に協力を頼み、そうして教えてもらったことのなかには、有力者と呼ばれる人間が、いかなる場所で、いかにして情報を収集するかの方法論があった。

その大抵は、懐に余裕のある人間が足を運ぶ場所に網を張るものだ、ということだった。

『うちもそんなことしてるんですか!?』

尋ねたアマンシールに、リュシアンドは肩を竦めて応じた。

『奴らと同じことをしているのか、と聞きたいのなら否だ』

息子の心の動きなどお構いなしに、世慣れた侯爵はこう続けてくれた。

『あの程度の場所で、充分な情報など手に入るものか。もっと手広くやっている』

いつもいつも、リュシアンドの期待を裏切ることで、天下のファラスース侯爵(こうしゃく)を手玉に取っているアマンシールだったが、この時ばかりは、泣きたいような思いを父に対して抱いた。

（父上……それってまさに、悪徳商人のやり口では……）

そのときは結局、口には出せなかったけれど、同じことをギスカリールがやっている。

いや、違うかも知れないが、少なくとも同じことを知っていて、対処している。

確かにこのひとは、見た目通りの年齢のひとではないのだと、こんな瞬間に思い知らされる。

けれど――だ。

だからといって、その違いを言い訳にすることはできない。

たとえ自分が思うより長く、ギスカリールが生きてきたのだとしても、彼が身につけた知識や経験は、彼自身の努力なくしては、あり得なかったはずのものなのだから――。

自分もまた、そうしてひとつひとつ、この手で摑み取るしかない。

「……まあ、情報の安全が一番だから、場所についての文句は引っ込めます。ですが、お酒はほどほどにしてください。わた……おれが一滴も飲んでなくても、服ににおいがついて困るんです。せっかく大学部への進学も決まったのに、不品行を理由に取り消されたくありません」

渋面で告げた彼に、ギスカリールは「この界隈で酒も飲まずに男ふたりで会ってたら、それこそ怪しんでくれって言ってるようなもんだ」と答え、取り合ってくれなかった。

怪しまれないための偽装と呼ぶには、いささか相手の酒量は多すぎるような気がしないでもなかったが、ではお前も飲めと言われてはたまらないので黙っておくことにする。一度、つきあい程度でいいから飲め、と勧められた酒を口にした結果、アマンシールはひどい二日酔いに悩まされたことがあるのだ――以来、ギスカリールから勧められた飲み物は、極力遠慮する知恵を身につけた。

（匂いぐらいでは酔わない程度に、酒気に免疫のある体に産んでくれてありがとう、

お母さん……だな）

満更冗談でもなく、アマンシールは母に感謝した。

酒の強さが男らしさに直結するとは、彼自身は考えていないが、そうした風潮があるのは確かなことなのだ――以前、優秀で人望も厚い上級生が、大学部に進んだ際、歓迎会と称する飲み会に誘われた結果、体質的に酒気とあわなかったその先輩は、匂いだけで意識を失ってしまい、そのせいで「つまらない優等生」という烙印を押されたという話を聞いた。

経験だけではどうしようもない問題があることを、早くから知っていたアマンシールは、その先輩は被害者だとすら思ったのだが、周囲の大半が「やっぱり男は飲めなきゃだよなー」という反応を示したことには驚いた。

親友のハーリクだけは、「体質ばかりはどうしようもない」と理解を見せたものの、「だけど、酒の強さで相手の器量を計ろうってやつは、古今東西どこにでもいるって話だからなー。個人的なつきあいだけなら、そうした輩とはなるべく距離を取って……ってことで話は終わるんだろうけど、仕事絡みとなると……確かに難しいよな

ー」とこぼしていた。

アマンシールは別に、大して好きでもない――いや、美味しい酒を適量なら、実は大歓迎の向きもあるのだが――酒をどれだけ飲めるかということで評価されても全然嬉しくなかったから、実感はできなかったのだが……確かに、この状況で、匂いだけで意識を失ったりしていたのでは話にもならなかったことに気づいての母への感謝だった。

けれど、それとは別に尋ねなければならないことがあった。

「……あれから、三年半が経ちました。新たなお方を選ぶ、新たな神宝は、いまだ目覚めてはいないのでしょうか？」

彼の問いに対するギスカリールの答えは、あまりはかばかしいものではなかった。

「それが、最近では神殿側からの情報が少なくなってきてね、正確なところはわからないんだ。いくら神座のお方の縁者でも、わたしは他国人だからな。言えることと言えないことがあるんだろう……と、期待を裏切っておきながら悪いんだが、おれもひとつ、聞いておきたいことがあったな。お前とクラン嬢、どうなってるんだ？」

問われた瞬間、なぜかどきりとした。

学ばなければならないことが増えてしまったのと、クランクレイア自身の王女としての務めもこの三年ほどで増したこともあって、以前のように週に一度は会えなくなって久しいのが現状だった。

（この間会ったのが先月……いや、先々月だったかな……？）

その、頻繁でない機会が、自分にとって幸いなのか不幸なのか、実のところアマンシールにはわからない。

なんというべきか……。

最近の……もうすぐ一四歳になるクランクレイアは会う度に、綺麗になっているのだ。

もともとが綺麗な少女だったのだが、ここ一、二年の変化は尋常ではない。まだまだ幼さの残る外見ではあるものの、そこに大人びた体の円やかさが加わるだけで、まるで別人のように思えてしまう。

正直なところ、最近ではあまり近づいてほしくない、と思う。

彼女の、自分に寄せてくれる信頼を裏切りたくはなかったからだ。
（三人目の兄のようだと……そう言って、慕ってくれたあの子の心は裏切れない……）
だから、アマンシールはギスカリールの問いにも知らん顔を通した。
「……どう、……って、さすがに会う機会も減った上、お互い時間の制約が増えたものですから、一緒に土いじりなどはできなくなってしまいましたが……他には別に、どうということも……」
しかし、ギスカリールはそんな誤魔化しに乗ってはくれなかった。
「そんなことを聞いてるんじゃない！　とぼけるのもいい加減にしろっての。それでも知らんぷりしそうだから、ここは単刀直入に尋ねるぞ？　お前とクラン嬢、どうなってるんだ？　少しは進展してるのか？」
答えは「否」に決まっている。
彼女が欲しているのは、何の遠慮もなく甘えられる兄なのだ。自分を、そうと信じて慕ってくれているのだ。

そんな彼女が最近眩しくて、思わず抱きしめたくなる——などと、どうして言えるだろう。

「あなたまで、なんの話をしてるんですか。わたしとクランさまのことは、三年半前の豊穣祭で公となったクランさまの真実のご身分目当てに、ボウフラさながらに出てきた婚姻話の盾となるよう、陛下と王太子殿下が用意なさった仕掛けであって……」

なんの関係もありません——と、告げた瞬間、なぜかギスカリールが舌打ちした。

「じゃあ、知らないんだな？」

なにを、と問うより先に、ギスカリールは告げた。

「クアン・クランドの元に、ガッシュマサラの国王から、婚姻の申し出があったという話だ。相手はガッシュマサラの領主のひとりで……同時に、このディエーンにおいても相続権を主張できるひとだという話だ」

「馬鹿な！」

反射的に、アマンシールは叫んでいた。

「クランさまはこの……ディエーンの王女殿下なのに!?」



国王の許しなくば、彼女に求婚することさえ許されることはない。

「違うよ」

淡々と、ある意味残酷に、ギスカリールは事実を並べたてた。

「彼女が真実『王女』なら、ガッシュマサラもこんな強引な手にはでなかったろう……けれど、お前はもうわかっているだろう？　王家の姫君に関しては、母権より父権が優先されるということを――。しかも、一国の王とはいえ、義理の父に過ぎない陛下と、実父で神座にあるクアン・クランド……どちらの許しを得る方が重要か、考えるまでもないことじゃないか」

それは……確かにその通りだった。

相手が国内の貴族であれば、たとえ正式に婚姻しようと、王家は……王は、クランクレイアの保護権を手放すことはないだろう。歴史上、縁戚の令嬢を王家に養女として迎えた例はいくつもある。

だが、その相手がれっきとした他国の王族で、しかも後に神座に就いた人であった場合は……!?

「そ、れで……ルーシアルのお方はなんと……？」

返答なさったのでしょうか――。

尋ねたアマンシールを前に、ギスカリールは盛大に吹き出した。

「お前！　顔に出すぎ！　そんなに顔に出してて、当て馬だなんてよくもまあ……」

そんな顔といわれても、アマンシールには実際、自分がどんな顔をしているのかはわからなかった。

ただ、血がす――っと下がるような気がして、立っているのがちょっと厳しく感じられて、握りしめたはずのこぶしが、全然熱を感じられなかった……ぐらいだったのだが。

恋愛初心者のアマンシールには、それがなにを意味するものかはわからなかったのだ。

22

「ああ、その話なら、確かに聞いている」
ギスカリールから聞いた話の真偽を確かめるため、アマンシールが訪れた先で、相手はあっさりとそのことを認めた。
ディエーン王太子フィオーンの私室でのことだった。
「で、では、クランさまは、ガッシュマサラ縁の方と……？」
話が通じていると聞き『成立してしまったもの』と思いこんだアマンシールは、まだまだ経験不足の未熟者だった。
呆れたようにため息をついたのは、相対しているフィオーンの方だった。
「言葉の意味をよく考えろ、ジェス。わたしは聞いていると言っただけで、父上が応

じられたなどとは、一言も口にしていないぞ？」

「え？　あ……」

確かにそれはその通りだったので、アマンシールは恥じ入ると同時に、自分がずいぶん混乱していたことを認識した。

「大体、以前の身分がどうであろうと、神座に就かれた時点で、柱神の方々が現世に干渉する権利は失われるんだ……たとえ血を分けた実の子供のことであろうともな」

「そ、う、なんですか……」

それまで知らなかったことを知ったとき、軽い興奮と喜びを感じていたのは子供のころのこと——最近では、底なし沼と知らずに覗き込んだ水面の正体を知って、恐怖を覚えることのほうが多かったように思う。

けれど、こんな風に、安堵の念を覚えたのは、これが初めての経験だった。

しかし、フィオーンはアマンシールに、安堵の念だけをくれたわけではなかった。

「ただし、世間に対する影響力は甚大だ。あのお方が、「認める」と一言おっしゃれば、それだけで抗い難い風潮が生じるのは目に見えている。なんのために、陛下がお

前をクランのそばに配したと思っている⁉」

「知りませんよ！」

反射的に、アマンシールは叫び返していた。

やれやれとばかりにフィオーンは肩をすくめた。

心底呆れた様子だった。

「虫除け兼、うまく運べば本命にするために決まっているだろうが。あの子に関してだけは、保護者の思惑より、本人の意志が重視されるに決まっているからな。なにしろ、気に入らない縁談なら、自分で飛んで逃げるだけの能力があるわけだし」

それは確かにその通りなのだが、実際クランクレイアがそうできるかどうかは疑問だとアマンシールは思った。

なにしろ彼女は、自らの出生に関して、長いこと劣等感を抱えて生きてきたのだ。なにひとつ恥じることない生まれなのだとわかったとはいえ、心ない噂に傷つき続けてきた彼女は、そんななかでも自分のことを大切に扱ってくれた国王やフィオーンに対して、特別なこだわりがあると思うのだ。

少なくとも、彼らを悲しませるような決断はできない程度には――。
だから、もし、彼らが期待しているとわかる縁談などが持ちこまれれば、彼女は決して拒まない……否、拒めないだろうと思ってしまうのだ。
それが、自分との話であってでも――。
ちくり、と胸の奥が痛んだ。ここ最近、なじみになった感覚だった。
「……すべて、あの方のお心に添う方向で……お願いします。どうか……」
胸が、苦しかった。
けれど、他人の思惑に添って、人生における重大な決断を、彼女に押しつけたくはないと思い、アマンシールは告げた。
フィオーンの答えには、少し間があいた。
「……あの子に、自ら選ばせよ、と……？」
かなうことなら――と、アマンシールは答えた。
クランクレイアには、絶対に幸福になってほしかった。
その願い故に、彼は本来許されないまでに僭越なことを口にしたのだ。

だが、しかし――次の瞬間投げかけられた言葉に、彼は絶句した。

「このわたしが、名乗りを上げたとしても……？」

アマンシールの頭はまっ白になった。

アマンシールに王家から、郊外の離宮（りきゅう）への招待状が届いたのは、豊穣祭（ほうじょうさい）が終わって間もなくのことだった。

正直なところ、フィオーンの言動に心乱されていた彼は、行きたくなかったのだが、正式な招待とあっては断れるものではない。

週末二日間に限定してのものであったから、なおさら断れなかった。

かくして、アマンシールは胸に重いものを抱え込んだまま、王家の方々に囲まれて、週末を過ごすこととなったのだ。

収穫（しゅうかく）期を終えたころとあって、朝夕に肌寒さを感じることも多くなった時期だった

が、それだけに紅葉が見事だった。
　久しぶりに会ったアマンシールに、クランクレイアは――こちらの複雑な気分も知らず――思い切り甘えてきた。
　あまりそばには寄ってきてほしくないというのが本音だったが、眩しいぐらいに綺麗になった彼女が、くらくらするような無防備な笑顔で話しかけてきたら、無視することも逃げることもできはしない。
「ジェス！　ジェス！　すごいぞ！　木立全体が、まるで燃えているようだ！　紙に挟んで漉いたら、どんなに綺麗な紙が出来上がるだろう！　拾いに行くから、一緒に来てくれ！」
　紫水晶の相貌をきらきらと輝かせ、バラ色の頬を紅潮させて叫ぶクランクレイアは、ここ数年で格段に大人っぽくなったとはいうものの、以前から知っている彼女そのものだった。
（あれ？）
　と、アマンシールは少しだけ意外に思った。

クランクレイアに寄せられている縁談やら、先日のフィオーンの意味深長な台詞やらを考えるだに、てっきり彼女にも話は通じており、そのせいでぎくしゃくするのではないかと危惧すら抱いていたのだが……全然その様子がない。

よくよく考えて見れば、複雑な立場にある少女なのだ、彼女は。

彼女を慈しみ、大切に思っている周囲が、普通より注意深く彼女の将来に備えるという話はありそうなことだった。

そう——たとえば、本人の心がどう決まるかもわからないうちに、可能性のあるすべての人物にあたりをつけることぐらい、やってて全然おかしくはないのだ。

そう、国王も王太子も、クランクレイアのことを、目に入れても痛くないほどに溺愛しているのだから！

（やられたー！）

と、アマンシールは思った。

ぐるぐるとひとりで思い悩んでいたのが馬鹿のようだ。

（そうだよな、彼女はまだ十四歳なんだし……）

そう思うと、一気に楽になった。
「わかりました。ですが、紙に漉くなら、一度水気が抜けるまで、乾燥させたほうがいいと思いますよ。そのほうが、綺麗にできると思いますし……」
「わかってる。でも、それは集めてからでもいいだろう？　東のほうに、とても綺麗に色づく木を見つけたんだが、水辺に近いんで、放っておくと、全部水に落ちて色が変わってしまうんだ。だから急がないと……ほら！」
無邪気にせき立ててくるクランクレイアの様子に、苦笑を洩らしつつ、アマンシールはうなずいた。
まだ、早い——まだ大丈夫。
呪文のように声なくつぶやくその言葉が、実は誰に向けられたものなのか、本人も自覚しないまま、彼は籠を手に歩き出した。

「ああ、これはだめです」

クランクレイアが案内した場所に並ぶ、鮮やかに紅葉した木を目にするなり、アマンシールは告げた。

「これは黄櫨の木です。皮膚の弱いひとはかぶれることも多いので、紙に漉くのには向きませんよ……確かに綺麗に色づいてますけどね」

彼の説明に、クランクレイアは不満そうに口を尖らせた。

「そうなのか？　だが、わたしは去年も拾ったが、なんともなかったぞ？」

黄色や橙、赤と、さまざまな発色を見せる黄櫨の葉は美しく、彼女がそう言いたくなる気持ちはわからないでもなかったが、その被害にあった人物を直に知っているアマンシールは断固として許さなかった。

漆ほどではないが、その仲間である黄櫨もかぶれると悲惨なのだ。強烈な痒みとともに、皮膚がぱんぱんに腫れ上がる。敏感な者など、黄櫨の木に近づいただけでそうなってしまうほどだ。

そのことを説明し、彼はつづけた。

「それに、いつもは平気でも、体調を崩したりして、体力が落ちたときなどは安心できません。指が曲がらないほど腫れて、しかも猛烈に痒い思いを味わいたいんですか？　以前、蕁麻疹ができた時、死んだ方がましだとおっしゃってたのはどこのどなたです？」

「……蕁麻疹……」

ぞっとしたように、クランクレイアがつぶやいた。

それは、約二年前のこと――彼女が十二になる少し前のことだった。

厳しい夏の暑さで体力が落ちたのか、彼女は秋の初めに生まれて初めての蕁麻疹に苦しめられたのだ。以来彼女は、夏でもきちんと温かいものを食べるようになった――体力低下の原因が、冷たいものばかり好んで食べていたせいだと医師に告げられたからだ。

「痛いのが苦しいものだとはわかっていたけれど、痒いのがあんなに辛いとは思わなかった」

とは、無事に蕁麻疹が治ったすぐ後にクランクレイアが口にした言葉で、こりごり

だという思いが如実に伝わってくる口調だった。

「蕁麻疹と同じくらいに痒くなるのか……？」

怖々と尋ねてくる彼女の、黄櫨の落葉に向ける目が変わっていた。

「少なくとも、母はひどい痒みを訴えてました。おまけに神経が過敏になって、一番ひどいときには食事にも難渋してました」

そこまで言われると、クランクレイアももう黄櫨の葉に執着は見せなかった。

「や、やっぱり、ジェスについてきてもらってよかった」

そう言い、黄櫨の木から、そろそろと遠ざかる。

「でも、そうなると、このあたりでは黄色い落ち葉しかないんだ……」

せっかく、綺麗な落ち葉を見つけたと思ったのに——と、心底残念そうに唇を噛む仕草の愛らしさに、すっかり治まっていたはずの胸の痛みが再燃し、アマンシールは思わず胸元に手をあてた。

彼女の邪気のない愛らしさを、こんな風に恨めしく思う日がくるなどとは、ほんの一年前までは考えもしなかったことだ。もちろん、原因は自分の心のありようにある

わけだから、彼女を責めるわけにはいかないが……しかし。
（だけど、ギスカリールさんやフィオーンさまにもいくらかは責任があるはずだぞ。あのひとたちがあれこれいらないことを口になさったりしなければ、こんなことにはならなかったはずなんだから……多分）
　責任の幾ばくかを年長の友人や王太子に負わせた後、アマンシールはクランクレイアに提案した。
「待ってください、池の向こう側にも、赤い色が見えますよ。黄櫨の色より深い赤ですから、もしかしたらかぶれない木かもしれません。行ってみますか？」
　さほど大きくはない池である。
　回っても、さほど時間はかからない。
　彼の言葉に、クランクレイアはぱあっと瞳を輝かせた。
「本当だ！　ああ、でも行ってみて、黄櫨だったりしたらイヤだから……」
　言いかけたクランクレイアの手首を、咄嗟に摑んだのは――一種の勘としか言いようがない。

「いけません！」

アマンシールの制止に、小さな舌打ちを洩らしたことで、彼女が風霊に頼んで空を飛ぶつもりだったことが判明した。

「約束してくださったはずでしょう、無闇に風霊の力は借りないと！」

「全面的には禁止されなかったはずだろう！　ここなら人目もないし、面白可笑しく噂される心配はないじゃないか！」

クランクレイアは不満げに口を尖らせた。

「確かにわたしは、お前と約束した。人目につくところでは飛ばないとか、急ぐときほど制御に失敗しやすいから絶対飛ばないとか……だから、ずいぶん我慢してきたんだ。お前が、どんな贈り物より、その約束の方が嬉しいと言ったからだ！　だけど、人目もなくて、焦ってるわけでもないこんな場所でも、飛んだらいけないと言うのか!?　それじゃあ、全然飛ぶなと言われてるようなものじゃないか！　わたしは風霊たちと遊ぶことも許されないのか!?」

クランクレイアの声には、激しい怒りが宿っていた。

物心ついて以来――いや、あるいはそれ以前から、彼女は風霊たちと親しみ、友としてつきあってきた。

空を飛ぶことは、彼女にとってはごく普通のことなのだ――心配だからやめてほしいというのは、あるいは周囲のわがままなのかもしれない。

だが、彼女は風霊の友ではあっても、風霊ではない。生身の人間なのだ。

しかも、アマンシールは出会ったそのとき、空から落ちてきた彼女に押しつぶされた経験がある――不安に思わなければ嘘だった。

「ここが王宮で、当代さまを慕う風霊たちばかり揃っていて……さらに池の上を飛び越そうなどと思われなければ、わたしだってうるさくは言いません。ですが……」

しかも、季節は晩秋にさしかかっている。

まかり間違って、池に落ちたら、取り返しのつかないことにもなりかねない。

そう説明しようとしたのだが、感情を激したクランクレイアは、耳を貸そうとはしなかった。

「充分口うるさいじゃないか！　近頃のジェスはなんでもかんでも駄目ばっかり！

しかもちっとも会いに来てくれないし、来てくれたとしても素っ気ないし、邪険にするし、すぐ帰ろうとするし……そりゃあ、ジェスはわたしより四つも年上で、学院のほうが忙しくなってるから、だから無理を言っちゃいけないって……わたしだって、我慢してるのに！」

……どうやら、クランクレイアはここ最近のアマンシールの態度に、相当腹を立てていたらしい。

それでも口に出さずにいたのは、彼女なりの思いやりだったのだろう。

しかし、そうは言っても、彼女はまだ一四歳――久しぶりに楽しく過ごしていたのに、説教めいたことを言われて、癇癪玉を破裂させてしまったのだ。

素っ気なく見えたのは、どんどん眩しくなる彼女に、どう接していいものか、アマンシールがとまどっていたせいだとか、邪険に感じられるような態度を取ったのは、やはり子供に対するように無邪気に触れられなくなったせいだとか、なんとなく居心地の悪さを感じて、つい距離を取ろうとした結果、早々に王宮を辞そうとしたことなどは……まあ、アマンシールの事情に過ぎないのだし、幼い彼女に察しろという方が

無理だろう。

しかし、そのあたりのことを、いったいどう説明したらいいのか……。

（え、ええっと……？）

言葉を探す態度が、ますます勘に障ったのか、彼女は「もういい！」と言い切った。

「もういい！　ジェスの馬鹿、馬鹿、馬鹿！　もう、お前なんて知らない！」

叫ぶと同時に、彼女の体がふわりと浮き上がった。

風霊たちの腕が、彼女の体を抱き上げたのだ。

「だ、だから、待っ……」

慌てて止めたが、時すでに遅し。

少女の肉体は、空高く舞い上がりかけていた。

以前とは、全然違う体なのに――成長し、円やかな曲線を描くようになった彼女の肉体は、子供のころのものとは全く違うものなのに！

しかも、いまは自分が彼女の手首を摑んで、お荷物状態になっている！

（これは……まずい！）

思うとほとんど同時に、アマンシールは浮遊しかけた自らの肉体を、重力の支配下に戻すべくただひとつの行動を取った。

彼は――摑んでいたクランクレイアの手を、自ら放したのだ。

クランクレイアの望みを受け、風霊たちはすでに彼らふたりを池の上まで引っ張り上げていた。その状態で、ひとりが手を放したとしたら……その結果は目に見えている。

木から落ちるのにも似た落下感――そして、地面に落ちるほどではないやわらかな衝撃と、冷たい水の感覚が全身に襲いかかってくる。

「ジェス！」

必死に自分を呼ぶ声が、聞こえたような気がした。

それが、大切な少女のそれに似ているような気がして……なんだか、それならそれでいいような気分を味わった。

なにもかもが一瞬のことで、詳しいことなどわからなかったのだけれど――。

23

クランクレイアはここのところ、ずっと不満を覚えていた。

なにが原因かといえば、七つのころからつきあってきた、四つ年上の少年の態度の変化だ。

女神の産みし娘として、称えられる一方で、裏では不貞の子――と噂されていたころに出会った少年。

自分を普通の子供として扱い――臣下として、王族に対する丁寧な言葉遣いこそ崩さなかったけれど――ことあるごとに説教めいたことを口にしていた彼……ジェス。

侍女たちの大半が眉をひそめる――例外はライラーナぐらいだった――植物採集や標本作りにも、イヤな顔ひとつ見せずに、時には自分以上に楽しそうにつきあってく

れた彼のことが、いつのまにか、長兄と同じくらいに大好きになっていた。

将来このディエーンの国を背負う立場にあるフィオーンのことは、やさしくて大好きだったけれど、あまり甘えてはいけないのだと、いつのころからか感じていたので、自分でもわがままだとわかるようなわがままを言ったことはなかった。言ってはいけないのだと、心に決めていた。

けれど、ジェスは……彼には、王女らしくないと非難の目を向けられる心配をせずに甘えたりわがままを言うことができた。言っても嫌われたりはしないと、なんとなく感じていたのかもしれない。

もちろん、度を超すようなことは言わなかったつもりだけれど、自分が誰に対するより、彼に甘えていた自覚はあった。

ずっと、こんな風に時が流れていけばいいな――と、思ったのはいつだったか。

それがかなわぬ夢なのだと……そう、自分は知っていたから。

十歳のときの豊穣祭（ほうじょうさい）を境に、クランクレイアの世界は大きく変わった。

ルーシアルの柱神の実の娘であることが知られて以来、それまで陰口をたたいてい

た侍女や女官たちは掌を返し、好意的な態度で接してくるようになった。

それが表層的なものであることはわかっていたから、クランクレイアは彼女たちをあまり信用する気にはなれなかった。

信じられるのは、心を許せるのは、以前と変わらぬ態度で接してくれる数人だけだった。

父、長兄、ライラーナ……そして、ジェス。

けれど、信じる信じないと、耳に入ってくる話は別の問題だ。

神の娘と認められたクランクレイアの耳に、侍女や女官たちはさまざまな噂を吹き込んだ——以前とは違い、そこに悪意は感じられなかったが、あまり面白くはない話ばかりだった。

あれは……豊穣祭が終わってしばらく経ったころのこと。

ジェスが、王立学院における多忙を理由に、それまでの毎週末の茶会を、月に一度の割合で断ってくるようになった——結局その頻度は次第に高くなり、いまでは月に一度会えるかどうかにまでなってしまったが——のだが、そのことを思わず愚痴った

クランクレイアに、そばにいた侍女が笑ってこう言ったのだ。

「いままでとは、事情が大きく違いますもの……神座にあるお方のご息女に、あまり気易く振る舞うべきではないと自覚なさったのでしょう」

聞いた瞬間、耳を疑った。

この侍女は、なにを言っているのかと思った。

折悪く、このときライラーナは風邪に伏せって休んでいたため、侍女たちの勝手なお喋りはつづいた。

別の侍女が相づちを打つ。

「そうですわね、あの方は確かに名門ファラスース家のご子息ですけれど、家名を継がれる長子ではいらっしゃらないわけですし……ねえ？」

意味ありげな流し目を、同僚に向ける侍女の表情は、以前偶然目にした、自分の出生の噂話に興じていた、別の女官とそっくりだった。

そして、それに応じる侍女の顔も。

「いまのクランクレイアさまなら、一国の世継ぎの方に求婚されてもおかしくはござ

いませんわ。かけがえなく、尊いお方なのですもの。対してあの方と言えば……いかに国内有数の名門の出であろうと、第三子では、釣り合いがとれませんわ」

別の侍女までもが話に入ってきた。

「しかも、大変な変わり者ではありませんか。家名に貢献するつもりもなく、あのように楽しそうに土いじりをなさって……わたくし、常々つきあわされる殿下がお気の毒で、お気の毒で」

率先して土いじりに誘っているのはクランクレイアである事実を、彼女は完全に無視するつもりのようだった。

彼女たちのほとんどは、以前、一度に十人近く辞めていった侍女や女官の代わりに、長兄やライラーナが厳しく審査して新たに入れた女性たちだったはずなのだが、本質的には前の面々とあまり違わない性質の持ち主のようだった。

あるいは、この王宮の環境が、彼女たちを変えてしまったのか……後者であることを、クランクレイアは願ったが、しかしどちらにせよ不快なことに変わりはなかった。

「なにを言ってるんだ。縁談など……わたしはまだ十歳なのに……」

侍女たちの話を打ち切るつもりで洩らした言葉は、しかし逆に一蹴された。

「殿下こそ、なにを言っておいでですか。王家の女性なら、生まれて間もなく婚約が整うことだとて珍しい話ではありませんのに。殿下のお歳なら、そろそろ話が出ない方がおかしいぐらいですわ」

「そうですとも。事実、陛下のもとには、すでに十件近いお申しこみが届けられているとも聞いておりますわ」

「それも、いずれ劣らぬすばらしい方々ばかりとか……」

「陛下は、きっと、殿下を可愛く思われるばかりに、国外に嫁がせるおつもりはないという話でしたけれど……」

「あら、では国内の貴族のご子息のどなたかに、と？」

「聞いた話では、ガラスメイア公爵家の御嫡男のタリマーク卿が有力な候補だという話だけど……？」

はしゃぐ侍女たちの様子をみるだに、自分の言葉が打ち止めどころかやぶ蛇になっ

てしまったことは簡単に知れた。
しかも——たとえ、彼女たちに悪意はなくとも、だ——聞くに堪えない噂つき。
（ジェスは馬鹿だ）
と、その時思った。
こんな馬鹿な女たちの言うことを真に受けて、顔を見せるのを控えるようになったのだとしたら、本当の馬鹿者だ、と。
けれど、その件に関しては、長兄である——本当は違うのだけれど——フィオーンがやさしく否定してくれた。
「彼が……ジェスが、そんな、まだ形にもなっていない理由で、君のそばから離れるような薄情者だと思っているのかい？」
「そんなこと、思ったこともありません！」
即答した。
当たり前のことだった。
けれど——でも……では、どうして？

疑問に思うことをやめることはできなかった。
そんな彼女に、フィオーンはやはり、穏やかに言い諭したものだ。
「彼がこれまで、君のためにならないようなことをしたことがあったかい？」
と――。
一度としてなかったことを、思い出すのはたやすかった。
だから「いいえ」と返した彼女に、フィオーンは嬉しそうにうなずいた。
その日から――クランクレイアは、ジェスにまつわる侍女たちの噂話を信じることをやめた。訳知り顔で口を開く彼女たちが、実のところ自分のこともジェスのことも理解していないのだと、はっきりわかったからだった。
信じて、いればいいのだ。
そう思って……だから、余計な言葉を口にしたりしないよう、心がけてきたのだけれど、それでも以前より距離感を感じるつきあいに、クランクレイアは淋しさを覚えることが多くなった。
あまり会えなくなったせいだと、最初は思っていたのだけれど、いつしかそうでは

ないことに気づかされた。

なぜなら……よくよく思い返してみれば、出会ってしばらく経ったころすでに、その淋しさは彼女の胸に生まれていたのだから。

どうしてそんな思いが、あの時生まれたのかはわからない。

詳しく記憶しているわけでもない。

ただ、彼と会っていて、ときどき胸をちくちく刺す棘は、きっとあのとき生じたのだということだけはわかっている。

そう……あのとき。

卯の花の下で、泣いている自分を、ただひとり、彼だけが見つけてくれたあのときに——。

大好きだ、と彼女は思い、その思いを口にした。

彼女にしてみれば、最高の好意を表現したつもりだったのだ。

『ガジェスはまるで、兄上みたいだ』

と——正確なところは覚えていないが、そんなふうなことを言ったと記憶してい

る。

当時の彼女にとって、兄――フィオーンはかけがえのない、大切で大好きなひとの代名詞だったのだから。

そうして、そのとき、ジェスはこう答えたのだ。

『わたしにとっても、あなたは妹のような方ですよ』

と。

それが――最初に感じた痛み。

あれから七年……痛みは年ごとに大きくなっていくばかりだ……。

目の前で起こった出来事を、クランクレイアはすぐには理解できなかった。

最近あまり会いに来てくれなくなった少年は、しかし口うるささだけは相変わらずで、危険などないはずの状況における――池を飛び越えるなど、彼女のなかでは危険

の内には入っていなかった——風霊との交流にさえ、とがめ立てしてきた。
それが鬱陶しいのと、日頃ためこんだ苛立ちが爆発して、クランクレイアは意固地になった。
（なんで、なにもかも、ジェスの言う通りにしなければならないんだ!?）
彼のほうは、説明もなにもせずに、好き勝手やっているというのに!?
猛烈に腹が立って、だから、言うことなどきくものか、と思った。
出会いが出会いだったから、心配性になるのは仕方ないと思ってきたが、それでもいい加減、これくらいのことは危険でもなんでもないのだと、わかってもらいたいとも考えた。
いつまでも、自分は、不意に聞こえてきた大声に驚いて、風霊との接触を誤り、空から落ちるような未熟者ではないのだと——知って欲しくもあって、わざとジェスの制止を無視した。
事実、十歳を過ぎ、精神的な負荷が取り除かれて以来、クランクレイアの能力は安定を増し、空から落ちることなど、万に一つもなくなっていた。話せば怒られること

はわかりきっていたから内緒にしていたが、夏場などは涼しい風の吹く空中で、風霊を支え手に、昼寝さえしていたのだ。

だから、ジェスに手首を捕まれたままでも、クランクレイアは不安など覚えなかった。

いっそ、彼ごと空に連れ出すことで、その認識を改めさせようとさえ思っていたのだ。

いつまでも出会ったころの未熟な自分ではないのだと、ジェスには是非ともわかってほしかったのだ。

なのに――。

「ジェス！」

クランクレイアの手首を摑んでいた手を放すことで、自ら池に落ちていった少年の名を、彼女は必死に呼んだ。

「ジェス！」

（ひどい、ひどい、ひどい！）

その行為が、万が一にも自分を巻き添えにしないためのものだとわかってしまうから、尚更いっそう切なく悔しい。

そう——彼は、我が身ごと、風霊によって宙に浮き上がったとき、恐怖ゆえではなく、支えきれないかもしれないクランクレイアの身を案じて、その手を放したのだ。

季節はすでに晩秋に近い。

そんな季節の池に落ちたら、どんなに健康な若者であっても『絶対に大丈夫』とは言い切れない。冷たい水は容赦なく体温を奪い取り、冷たく凍えた体は動きを鈍くする。

「ジェス！　この馬鹿！　早く、早く、この手につかまれ！」

風霊に頼んで、水面近くを浮遊してもらいながら、クランクレイアは懸命に手を伸ばした。

だが、ジェスはその手を取ろうとはしなかった。

「わたしは大丈夫ですから、あなたこそ早く水辺から離れてください！」

彼の言葉を額面通りに信じられたなら、クランクレイアも言われるとおりにしただ

ろう。

しかし、ジェスの言葉は、とても信じられるものではなかった。

泳ぐことに集中しているならともかく、ことあるごとにクランクレイアを振り返っては、「早く岸に戻りなさい！」と繰り返す彼の唇の色は、どんどん血の色を失っていく。

このままでは本当に、彼の体力が尽きてしまう――直感的にそう悟ったクランクレイアは、すぐに風霊に頼んだ。

「岸に……岸に戻って！」

自分のために、ジェスが命を落とすなど、絶対にあってはならないことだったから、彼女は必死だった。

その足が、地に着くなり、彼女はこれまであまり親交のなかった地霊に呼びかけた。

「お願いだ！　ロープの代わりになるような、長くて頑丈な蔓か蔦を……どうか！　大事なひとなんだ……失いたくないひとなんだ！　だから、どうか……！」

叫ぶその声に宿る想いが相手に届いたのか、すぐそばの大木から、大人の男性の親指ほどの太さのある蔦(つた)が、ざぁっと音を立てて落ちてきた。

それは、本来ならあり得ない現象。

偶然などでないことを知るからこそ、クランクレイアは心からの感謝の言葉を、大地に、世界に投げかけ、同時に動いた。

「ありがとう！」

叫んだ次の瞬間には、彼女は蔦の端を掴んで岸辺へ走っていた。

そうして、風霊に、頼む。

「これをジェスに届けて……！　頼む！」

魂消(たまぎ)るような声だった。

命を賭(と)しても一片の悔いもないと言わんばかりの声だった。

事実、このとき、彼女はそれだけの想いをこめて行動していた。

だから……なのだろうか。

激情を嫌い、人間の平常心こそを愛する精霊たちは、彼女の願いをかなえたのであ

る。

それは、ひとつの奇跡だった――。

24

「馬鹿！」

びしょぬれで池から這い上がったアマンシールに、まず最初に投げつけられた言葉は、少女のきつい罵倒だった。

濡れるのもかまわず、アマンシールの胸に飛び込んできたクランクレイアは、彼の胸をこぶしで叩きながら、「馬鹿、ジェスの馬鹿！」と繰り返した。

心配をかけてしまったことは反省していたが、クランクレイアを巻き添えにせずにすんだことには大いに安堵を覚えていた彼は、対応に困った。

なにより、ずぶ濡れの自分に抱きついたら、せっかく無事にすんだ彼女の衣服まで濡れてしまう――そのことの方が気になった。

「……クランさま。お叱りは、どうか後で……このままでは、クランさまのお召し物が……」

そう言い、やんわりと体を離そうとしたのだが、その言葉と仕草は、逆に彼女の怒りを大きくさせるものだったらしい。

「だから！　ジェスは馬鹿だと言ってるんだ！」

アマンシールの濡れた上着の胸元を、むんずと摑んだまま、怒鳴りつけてきたクランクレイアの紫の双眸は、激情に燃え盛っていた。

そう、怒りという名の激しい感情に。

我知らず、見とれてしまった。

頬を紅潮させ、瞳を怒りに燃やすクランクレイアの姿は、アマンシールがこれまで目にしてきた彼女のどんな姿とも違っており、しかも魂を呪縛されるほどに美しいものだったからだ。

思わず目を瞠り、動くことさえ忘れてしまったアマンシールの様子には気づかないらしい少女は、生気に溢れた顔と声で、彼を糾弾し始めた。

「なぜ、手を放した!?　しかも、わたしの体が浮き上がる瞬間ではなく、池の上に移動したところで……そんなことをしたら、池に落ちることぐらい、わかっていたはずなのに！」

そんなにわたしの力が信じられなかったのか!?

詰(なじ)る声には、非難の響きが宿っていた。

「なぜ、……って……」

(そんなの、万が一にもふたりして池に落ちるようなことにならないようにと思ったからに決まってるじゃないか)

と、アマンシールは思ったが、見上げてくる彼女の瞳に、怒りだけではない、傷ついたそれをも認めた瞬間、声にすることができなくなった。

「……そなたは、わたしのことを信じてない！」

それはある意味真実だったから、アマンシールは咄嗟(とっさ)に答えることができなかった。

神の娘と、無条件に彼女を崇拝(すうはい)する者たちのように、彼女のすべてを信じることが

できずにいるのは事実だからだ。

出会ったきっかけがきっかけだったせいもあるが、それだけが理由ではない。

神学院に籍を置いていた次兄や、柱神の縁者であるというギスカリールから、それなりの情報を仕入れていたからこその危惧だった。

すなわち、精霊に愛され、親しくつきあえる人間は、確かに存在するものの、その能力は決して万能でも無限でもない、と彼らは口を揃えて言ったのだ。

いかに大変な資質を秘めていようとも、力を行使する人間のそのときの状態によって、揮える力には差が生じるのだと。

悲惨な結果を招く最大の理由のふたつが、体力の不足と、不安定な精神状態なのだと。

聞いてしまったら、もうクランクレイアに力の行使をやめさせることしか考えられなくなったのだ。

以前は、まだ幼い彼女の体にかかる負荷を心配するがゆえに――ここ一二年は、思春期にさしかかろうという、彼女の心の不安定さゆえに。

それは確かに、彼女に詰られても仕方のない……そう、彼女のことを信じていない身勝手な判断であり、指図であると、言われても仕方のないことではあったのだけれど。

（だけど、じゃあ、どうしたら良かったって言うんだ!?）

信じ切るには危うすぎる彼女の一面に目を瞑って、素知らぬ顔でいればよかったのか!?

自問するまでもなかった——答えは否。

「……あなたの力が万能ではないことを知っているのに、無条件に信じられるはずがないでしょう？」

そう返した瞬間、クランクレイアはなんとも形容できない感情の色を双眸に映し、くしゃりと顔を歪めた。

「そなた……そなたは……！」

咄嗟に、「そんな顔をしないで下さい」と言いながら、彼女の体を抱きこもうとする衝動を、アマンシールが堪えたのは、偏に「そんなことをしたら、ますます彼女が

濡れてしまう」からという理由ゆえだった。

共に濡れ鼠となるより、自分ひとりですむものなら、と思って手を放したというのに、結果的にふたり揃ってずぶ濡れになって、挙げ句彼女に風邪でもひかせたら、自分の決断が無意味なものになってしまうではないか。

しかし、彼のこの、自制した仕草がまた、クランクレイアに誤解されたのだ。

彼女は、両目いっぱいに涙をたたえてこう叫んだ。

「そなたは……っっ！　冬の近い池に落とすような酷い真似を、そなたに対してする人間だと、わたしのことを思っているのか……!?」

思いがけなさすぎる言葉を投げかけられた時、ひとはひどく間抜けな顔をするのだと……そのとき、アマンシールは我が身を以て知った。

「はあ？」

問い返した彼の顔も声音も、はっきり言って間抜け以外のなんでもなかったとは――後に無事和解したクランクレイアの言である。

まあ、つまり……そのとき、彼は、それだけ意表を突かれた――ということだろ

う。

「なにを言ってるんです？」

正直、クランクレイアの真意が読めず、洩らした一言に、紫がかった黒髪の美しい少女は、さらに詰る言葉を口にした。

「そうであろう!?　あんなところで、わたしの手をふりほどくだなんて……わたしが、そなたを支えきれず、落ちると思っていたのだろう!?　つまりそなたは、わたしが、自分以外の誰か他の人間を巻き添えにする程度しか、力が制御できないと思っているのだろうが！　それはわたしのことを信じていないなによりの証拠ではないか！　いつまでも、いつまでも、わたしのことを子供扱いして……悔しい。わたしはそれが悔しい！」

握りしめたこぶしを震わせながらの訴えに、アマンシールも一瞬言葉を失った。

彼女の言い分の大半は、確かに事実だったからだ。
だが――。
（もう、子供じゃないからこそ、危険だと思った……んだけど……）
けれど、そのことをうまく説明する自信はなかった。
ただ、誤解だけは解いておこうと、口を開いた。
「子供だなんて、思ってませんよ」
これは、掛け値なしの本音だった。
そうでなければ、会う度に胸が苦しくなったり、だから会いたくないと思ったり、けれど会わずにはいられなくなったりはしない。
だが、見るからに旋毛（つむじ）を曲げてしまったらしいクランクレイアは素直に受け取ってくれない。
「嘘だ」
「嘘じゃありません」
「嘘だ」

どこまでも強情に、クランクレイアが言い張った。
「でなければ、いつまでも絵本や遊戯盤ばかり贈ってきたりはしないものだと……聞いた」
（……）
一瞬、思考まで停止してしまったアマンシールだった。
ここ三年ほどの、彼女への贈り物の数々を反芻してみる。
植物に特に興味を示す彼女のために、詳しい図解入りの植物図鑑を、確か数冊……。
確かに、絵がたくさん載っている本、には違いないが。
（あれは、絵本と呼べるのか？）
さらに、遊戯盤というのは、さまざまな国で戦略を練る際に用いた駒や盤が原型となったもので、相当な知能が要求されるものばかりだったはずなのだが――。
悩むアマンシールは、実のところ、ディエーンの女性の教育状態をよく知っていなかった。

いや、ディエーンに限らず、当時の女性は、裕福な家庭に生まれても、貴婦人としての嗜み以外の教育は受けないことが当たり前だったのだ。

語学と詩文、音楽、刺繍、立ち居振る舞い――これらのことに通じていれば、貴婦人として充分とされていたのである。

王宮に上がることを許された侍女や女官にしても同様で、彼女たちの目から見れば、彩色もあざやかな図がたっぷり載った本は『絵本』、遊戯盤など子供の当時遊んだ、賽子の目次第でことが運んだスゴロクと大差なかったのだ。

しかし、重ねて言うが、アマンシールはそうした事情に通じていなかった。

気づいたのは、別のことだった。

(そういえば、遊戯盤のことでは、クランさまはよく不平を洩らしてたよな。確か、わたしやフィオーンさま以外とは遊べなくて、それがつまらないと)

やはり、女性同士で遊べるものを贈るべきだったのかもしれない、と彼は反省した――的はずれなものだったが。

「……それは、申し訳ないことをいたしました。もう少し、考えるべきでした。今度

は、女性同士でも楽しめるようなものでも……」

ご用意しましょう――と。

恐らくこれで正解――と、思って謝ったアマンシールだったが、これは大外れの大失敗だった。

「やはり子供扱いではないか！」

クランクレイアに怒鳴られ、彼は途方に暮れてしまった。

「じゃあ、どんなものを贈れば、クランさまは納得して下さるんです!?」

問い返した彼に、クランクレイアは何とも複雑な表情になって考えこんだ。

「クランさま？」

「ん、んんーと……その、たとえば、花束だとか……？」

「だって、クランさま、切り花は寿命が短くて可哀想な気がするから、世話する楽しみもある鉢物のほうが好きだと仰ってませんでしたか？」

七年のつきあいは伊達ではない。

彼女の私室には二十個を超える鉢植えが並び、庭の一画には、庭師の許しを得て作

った花壇と温室があることを彼は知っていた。
「んー、お菓子とか……」
「以前、評判の菓子職人の作ったものを持って行ったとき、王宮で出される菓子のほうが美味しいとおっしゃられていたような……」
二三度持って行ったが、悉く「うちのほうが美味しい」と言われた記憶がある。
「か、可愛らしい小物とか……」
「増えすぎても置き場に困るから持ってくるなと言われたような気が……」
ハーリクに勧められたこともあって、一緒に選んでもらって陶器の小物入れを持参したときの、彼女のけんもほろろな態度は忘れられない。
当時、初めて覚えたアマンシールに対する独占欲ゆえに、学友であるハーリクにまでクランクレイアが敵愾心を覚えていたことを……彼は知らない。
「しゃ、洒落た手巾……とか、て、手袋とか……」
提案するクランクレイアの声が、徐々に追いつめられていくのに、アマンシールは気づいていなかった。

当然、追いつめているのが自分である自覚もない。

「手巾も手袋も、土いじりには向かないから、軍手や手ぬぐいのほうがよほどありがたいともおっしゃってたのでは……」

そこまで、アマンシールが言ったときのことだった。

びしゃり、となにか冷たいものが彼の顔面にぶつけられた。

(え?)

頬(ほお)をつたう、不思議な感触に、指をのばしてみたら……それは泥だった。

(泥団子(どろだんご)? え、なぜ?)

とは思っても、ここにいるのが自分とクランクレイアのふたりきりである以上、ぶつけてきた相手が誰かは決まっている。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿! ジェスの大馬鹿者!」

今にも泣き出しそうな顔をして、両手を泥だらけにして、クランクレイアが叫んだ。

そうして、二個目の泥団子をぶつけてくる。

「ク、クランさま!?」

一体なにが、彼女の逆鱗に触れたのかわからぬまま、慌てる彼の左頬に、泥団子第二弾命中。

「やっぱり！　子ども扱いしているではないかっっっ！　ジェスなど大嫌いだ！」

そう叫ぶなり、彼女はとどめとばかりに三個目の泥団子をアマンシールの鼻にぶちまけて、そのまま、彼を置き去りに駆け去ってしまった。

取り残されたアマンシールは、呆然とつぶやいた。

「……いったい、なんなんだ……？」

と。

自身の朴念仁ぶりを、彼が思い知るのは約二時後のことである。

「ひどいありさまだったらしいな」

なぜだか面白そうな気配さえ漂わせ、湯上がりのアマンシールを部屋に迎えいれたのは、さんざん彼の心を波打たせてくれた張本人――フィオーンだった。

「なんでも、全身ずぶぬれの上に、顔は泥まみれだったとか？」

事情の大半を、知らぬはずもあるまいに、フィオーンはどこまでも楽しげである。詳しいことはクランさまに聞いてください――と、言いたいところだったが、アマンシールはその一言を発することができなかった。

どう考えても八つ当たりされたとしか思えないやり取りだったのだが、それでも胸に引っかかってしまうのだ――彼女が最後に自分を見た時の、傷ついた瞳が。

「……どうやら怒らせてしまったらしくて……馬鹿と怒鳴りつけられました」

答える声が、自分でも意外なほど弱々しいのに内心驚く。

彼女の「馬鹿馬鹿」連呼と「大嫌い」発言が、思いの外応えているらしい。

その様子にも、フィオーンは楽しげな様子を崩さない。

少しだけむっとした。

「それで？　いったいなにをして、彼女を怒らせたんだい？」

興味津々といった体で尋ねられ、アマンシールは一瞬答えるべきかどうか悩んだ——他人の娯楽にするために、先ほどの出来事を話す気にはなれなかったからだ。

だが、相談できるのは、目の前の王太子しかいないのも事実だった。

ため息をひとつ洩らし、彼は順序立てて打ち明け始めた。

「……池の向こう岸に紅葉らしい木を見つけたとき、彼女が飛ぼうとしたんです。止めようと手首を摑んだものの、そのときにはわたしの体ごと、宙に浮いていて……」

「なるほど」

と、フィオーンはうなずいた。

アマンシールとクランクレイア——その両方をよく知る青年は、その後の出来事をほぼ完璧に見通していた。

「それでお前は咄嗟にあの子の手を放し、池に落ちてずぶ濡れになったというわけだ、この冬も近いという季節に？　さぞかしあの子は怒ったことだろうね」

「……はい。そなたはわたしを信じていない、と——」

やれやれとばかりに、フィオーンが肩をすくめた。

「不器用なことだ。そうではないと、万が一にもあなたが危険に晒されるのが耐えられなかっただけなんだと、言ってあげればよかったのに」

（そうだろうか？　けれどそれは彼女の力を信用していないという意味では、肯定するようなものだったと思うけど……）

そんな彼の心中には気づかぬ様子で、フィオーンが首を傾げた。

「それで、怒りの泥団子炸裂というわけかい？　あの子が君に甘えて八つ当たりすることは珍しくないけれど、それだけのことで、というのは珍しいね」

得心が行かない、と顔に書いた青年に、アマンシールは「ああ、いえ」と頭を振った。

「その後、なんだか話がずれてしまって、子供扱いしてる、してないの言い合いになりまして……まあ、それはわたしが悪かったと思うんですが。喜んで受け取って下さるものだから、いつまでも変わり映えのしない品ばかり贈っていたんですから……」

彼女も年頃なのだから、欲しいものが昔と違うようになってもおかしくはない――そのことに、もっと早く気づくべきだったのだ。

「ふうん？　それで？」
フィオーンが意味ありげにつぶやき、先を促した。
「謝罪したんですが、それでまた子供扱いしてると憤慨されて……」
促されるままに、アマンシールはその後のやりとりを再現した。
全部打ち明けた後、フィオーンの判断を仰ごうと、顔を上げた彼は、なんとも複雑そうな――まるで、笑うべきか呆れるべきか迷っているかのような――顔をした相手の眼差しにぶつかり、困惑した。
「……お前は、馬鹿か」
「フィオーンさま……？」
言われている意味が理解できず、きょとんとした顔になった彼に、王太子は処置なしとばかりに、何度も頭を振った。
「お前は木石か？　いいか？　ではなにが欲しいのかと尋ねたのに対して、あの子は花束や菓子、可愛い小物や洒落た手巾、手袋……と答えたんだろう？」
この段階に至っても尚、アマンシールはフィオーンの言わんとするところを理解で

きずにいた——木石扱いされても仕方のないところである。

「はい。ですが、それは以前贈ったときには、あまり好評ではなかったものですから……」

「馬鹿。それではクランが子供扱いされたと怒るのは当たり前だ」

クランクレイアに続き、フィオーンにまで「馬鹿」を連呼されてしまった。

「お前は世間に疎すぎる。大馬鹿なお前は、放っておいたら手遅れになるまで答えをみつけられそうにないから教えてやるけれど、世間一般ではね、それらは、好意を抱いた女性に男が贈る代表的なものなんだ。まあ、花束や菓子は、友情の表現に使われることもあるが、小物や手巾、手袋のたぐいは、求愛の代名詞にまでなっているんだ。わからないのか？　実際にあの子がそうした品に執着がなくとも、だ。お前からは欲しいと言うわけだ」

フィオーンの言葉は、すぐには頭にしみこんでこなかった。

じわり、じわりと……徐々に理解が進むにつれ、アマンシールは顔が熱くなるのを感じた。



「え？　え？　え？」

「いつまでも狼狽えているんじゃない。わかったら、さっさと謝りに行って来い。ああ、馬鹿正直に、言われた通りのものなど用意していくんじゃないよ？　言われたから持ってきただけなんだとあらぬ誤解を招くだけだと思うからね」

まさにその通りのことをしようと思っていたアマンシールは、「は、はいー」と、間抜けな声を上げて、そのままフィオーンの部屋を飛び出した。

ファラスースの第三侯子の、いまだ成長期にあるその背中が、分厚い扉の向こうに消えるなり、フィオーンは大きく息をついた。

「どこまで世話が焼けるふたりなんだ……」

父王と話し合い、自分でその人柄を確かめた上で、クランクレイアを任せられるのはアマンシールしかいないと、決めたのは自分自身だった。

かの侯子を焚きつけるために、自身も彼女の婚約者候補のひとりだと言ったりもしたが、実のところ、それはあり得ない話だった。クランクレイアはオルレイジア姫の忘れ形見――彼にとっては従妹なのだから。

ディエーンにあって、ほとんどの有力貴族は、始祖の血を受け継いでいる。近親婚は、なにより忌避すべきものだった。従兄妹間の婚姻など、まずあり得ない。

だから、フィオーンにとって、クランクレイアは妹以外の何者でもないのだが、それとは別に複雑な兄心というものがある。

これは父心とも通じるものがあるのだが、可愛い妹（父親の場合は娘）の幸福を、心から願いそのために腐心する一方で、愛しくてならない妹（父の……以下略）を、他の男に持っていかれることが悔しくてならないのだ。

兄馬鹿丸出しの本音が許されるなら、「誰にもどこにも嫁になんか出したくない」と大声で公言しているところだ。

もちろん、そんなことが許される立場でも、言える性格でもない彼は、理解ある兄という役割を担ってきたわけだが。

だからといって、可愛い妹が巣立つ日を、率先して早めたいわけではない。

国内外から押し寄せる、害虫……もとい、求婚者たちを完全に撃退できたら、本命なれど虫除けの用途大の相手――言うまでもなくアマンシールのことである――には、ぎりぎりまで待たせるつもりだった。

早い話、婚約さえ整ってしまえば、駆除はほとんど完了したも同じ、結婚までの期間が二年あろうと三年あろうと四年あろうと五年あろうと――六年以上はさすがに難しいだろうが――かまわないはずで、実のところ父国王も同じような心持ちでいるはずだった。

ところが、である。

自分と父が、これでもかとばかりに舞台を整えてやっているというのに、当人同士の仲は一向に進展する気配がない。

出会いが早すぎたせいで、そうした感情に育ちにくいのかとも一時期は思ったものだが、ふたりを見ていれば、少しずつだが、互いに対する感情が、肉親に向けるそれとは違うものに変化していくのがわかるものだ。

にも関わらず、いっかな進展しないさまは、見ていてイライラするものだった。
黙っていられず、口出ししたこと一再ならず――挙げ句の果てに、最後の後押しまでする羽目になってしまった。
非常に、面白くないというのが、フィオーンの偽らざる本音だった。
だから、最後の最後に、少しだけ意地悪してやることにしたのだ。
くすくすと、いよいよ余所の男に妹を奪われる兄は笑った。
「言われたとおりの品など持って行くなとは言ったけれど……ジェス。手ぶらで行ったら、きっとお喋り雀の侍女たちが、誠意がないとかなんとか喧しくクランの耳元で囀ること間違いなしだよ？」
フィオーンは血の繋がった弟以上に、アマンシールのことを気に入り愛していたが、それ以上にクランクレイアのことを溺愛しているのだ。

25

ずぶ濡れではないが、『半濡れ』状態でクランクレイアが離宮に戻るなり、周囲は大騒ぎになった。

有無を言わさぬ勢いで、濡れた服を脱がされ、温かい風呂に入れられ、火熨斗をあてたばかりの温かい服を着せられ、やはり火熨斗をあてたばかりのぬくぬくの寝台におしこめられた。

忙しなく室内を動き回る侍女たちの間で飛び交う甲高い声は、正直なところささくれだった神経を刺激するばかりで、不快なものだったが、心配をかけてしまった自覚はさすがにあったので、クランクレイアはおとなしく我慢することにした。

尤も、それは彼女たちの話題が、事実とは異なる方向に走り始めるまでのことだっ

たが。

「冬も近いというのに、なんということ……！」

「お風邪など召されては大変です。姫さま、悪寒や喉の痛みを感じたりは……？」

てきぱきと、周囲に采配を揮う一方で、問いかけてきたのはライラーナだった。

「ない」

と答えると、いつも親身になってくれる侍女頭の女性は、にっこり笑ってうなずいた。

「では、体が温まるよう、生姜入りの葛湯を作りましょうね」

体が冷えたとき、ライラーナがいつも手ずから作ってくれる生姜入りの葛湯は、クランクレイアにとっては大好きな飲み物のひとつだった。

ほかの誰が作ってくれても、同じように美味しく感じられないところから察するだに、なにか隠し味があるのだと思うが、そのあたりのことは、ライラーナは「秘密です」と言って、決して教えてくれないのだ。

けれど、このとき、クランクレイアの心にかかっていたのは、別なことだった。

強情に意地を張っても、これまでの経験上取り合ってもらえないことをよくよく知るからこそ、彼女は侍女たち――主にライラーナ――が一息つくまで、黙って待ったのだ。

ライラーナ特製の葛湯を飲みきってから、クランクレイアは恐る恐る、一番信用している女性に問いかけた。

「あ、あの……ジェスは……どうしてる……？」

わけのわからない怒りと苛立ちに駆られるまま、あの池のほとりに、彼を置き去りにしてしまったことを、クランクレイアは悔やんでいた。

彼は――池に落ちたのに。

蔦を摑んで池から這い上がってきたとき、唇はすでに紫がかっていたのに。そんな状態だった彼に、自分は癇癪を起こして八つ当たりしてしまった。

離宮にたどりつくころには、少しは頭も冷めていたけれど、半身が濡れた服のせいで、冷えて……否、凍えかけてしまった唇は、うまく事情を語ることができなかった。

震える声で、ようやく紡げた言葉は――。

『ジェスが！　ジェスが池に落ちて……！』

それだけだった。

周囲が騒がしくなるなか、クランクレイアは駆けつけてきた侍女軍団に、浴室に運びこまれてしまったのだ。

あのときほど、自分を不甲斐なく思ったことはなかった。

彼が、自分のことを子供扱いするのは当然だと思った。

大人だったらきっと、あんなことで怒ったりしないはずなのだ。池に落ちて、真っ青になっている彼に、駄々をこねたり……きっと、絶対、しない。

（おまけに、わたしは、腹立ち紛れに泥団子までぶつけて……！）

そんなことをする自分が、子供以外のなんだというのだろう。

（ああ、いっそ、穴があったら入りたい……！）

クランクレイアは自己嫌悪のあまり（穴がないなら掘ってでも……）という、脈絡のないことまで考えていた。

そんな彼女を安心させてくれたのは、いつも他の誰より親身になってくれて、同時に誰よりも厳しいことを言う、大好きな侍女頭だった。

「大丈夫ですよ、先ほど無事に戻ってらっしゃいました。王太子殿下がすぐに浴室に追い立てられたそうで、いまごろ人心地つかれてらっしゃることと思いますよ」

その言葉に、クランクレイアは心底ほっとした。

（よ、よかった……）

思った途端、目頭が熱くなり、涙がこぼれ落ちた。

「あ……」

決して泣きたいわけではないのに、涙は後から後から溢れて止まらない。

「わたし……こんな……」

感情の制御ができないことを恥じ、悔いたのはほんの先ほどのことなのに、またしても同じことを繰り返している。

（わたし……なぜ。こんな自分は望んだことだってなかったのに……！）

誰にも、見られたくはなかった——たとえライラーナにでも。

それは誇り高き王女としての矜持ゆえではなく、己が未熟さを恥じる少女ゆえの思いだった。

がばっと掛け布団のなかに、頭まで埋めて……そうして、彼女は涙を隠した。

けれど、このままではアマンシールの無事な姿を確かめることはできないことに思い至り、布団越しに、ライラーナに尋ねた。

「あ、謝らなくてはならないことがあるんだが……あ、会える、だろうか……？」

誰に、と言わずとも、ライラーナはわかってくれていた。

だが、同時にクランクレイアに無茶を許してはくれなかった。

「姫さまはもちろん、大丈夫だとわたくしたちが納得するまで、寝台から出ること厳禁ですわ。ただし、あちらからお見舞いいただくという話でしたら、姫さまのご体調次第で、陛下も王太子殿下も、反対はなさらないと思いますけれど？」

要は、向こうから見舞いに来てくれる分には、なんの問題もないけれど、こちらから出向くのは許可できない、ということだ。

言い分はわかる……わかるけれど、それでは駄目なのだ、とクランクレイアは思っ

た。

謝りたいのは……そして、謝らなければならないのは、自分の方なのだ。相手に出向いてもらって謝るというのは、どうにも筋が違う。

けれど、ここでそのことを強硬に主張しても、逆効果にしかならないことぐらいはわかる。

だから、おとなしくうなずいた。

「わたしが、風邪さえひかねば、会いに行ってもかまわないのだものな？」

ライラーナが「ええ」とうなずいた。

「ただし、あちらがお風邪を召された場合は、やはり感染る心配がなくなるまでは許可できませんけれど」

予防線とも言えるライラーナの言葉に、クランクレイアは渋々といった体でうなずいた。

「無茶はしない……わたしのせいで、ジェスがこれ以上ひどい噂の的にされたりしたら、わたし自身、わたしのことが許せなくなると思うから」

それは、紛れもない、クランクレイアの本心だった。

こくこくと、ライラーナが何度もうなずきながら「その通りですわ」と応じた。

「わたしは……もう少し、大人にならなければいけないのだと思う……」

紫水晶の双眸を、宙に向けて決意表明する少女の心底にある想いは、決して誰にも悟られることはなかった。

西の空の残光が、夜の闇に取って変わられるころ、星々の光と、満ちかけた月の光のみが照らす場所で、アマンシールは一心にあるものを探していた。

それは自然の生み出す奇跡――それでいて、興味を覚えぬ者にとっては塵芥に等しいもの。されど、それを奇跡と感じる者にとっては、なによりの宝。

条件は、晩秋、水辺と流れる清水――淀むことないその流れは、彼の求める奇跡を見いだすには最適な場所だった。

「満月だったら、一番だったんだけど……まあ、贅沢は言えないか」

苦笑混じりに肩を竦めながら、彼は流れる清水のその向こうを見つめる。

ほんの一瞬しか生じない、空の光を反射する、きらめきを見逃さないように。

見つけたら、決して見逃したりしないように。

晩秋の、淀むことなく湧き出る泉より発する流れの底にだけ、稀に見いだすことのかなう『月の葉』を。

そうして、彼はついにその瞬間を目にとらえた。

それは、水底にあるにも関わらず、月光を映したかのごとく輝いていた。

「見つけた……」

ほっと息をつき、注意深くそれを取り上げたアマンシールは、けれど同時に、わずかに顔を歪めた。

「でも、どうなんだろう……」

迷子のような、頼りない声でつぶやきながら、彼はようやく手にした『月の葉』を見つめた。

それは、葉脈のみを残し、色素までもが水に洗い流された落ち葉。
半透明となった葉脈は、光の反射次第で輝き、それゆえに『月の葉』と呼ばれるようになった。
陽の葉と呼ばれないのは、陽光のまばゆさゆえに、水面がそのほとんどを反射するため、水底までその光が届かないせいだと言われている。
（彼女は、これを喜んでくれるだろうか……）
昔の彼女なら、きっと喜んでくれたと確信できる。
けれど、いまの彼女は？
いや、違う。きっといまでも喜んでくれる。それだけは確信できる――ただ、問題なのは。
（こ、これは……彼女の言うところの可愛い小物に分類されるんだろうか？　それとも、珍しい植物採集物に？　後者だったらどうしよう!?）
フィオーンの後押しを受けて、やる気になっていたアマンシールだが、彼の知識はあくまで偏ったものだった。

つまり、月の葉の幻想的な美しさと同時に、その原理をも、クランクレイアに説明していたのである。これでは、いくら奇跡的に美しい存在といえども、「おお、すごいな。これは永久に朽ちぬよう、保存方法を考えなければ！」と、喜々として言われてお終いになりかねない……。

（う、うーん……？）

これが多分正念場なのだという自覚はある。

だからこそ、失敗は許されないという負荷がかかってきて、思うように動けない——なにしろ、好きに動いた挙げ句、クランクレイアの真意を読み取れずに大ポカをやらかしてしまったのだから。

（う、うーんん）

思わずその場にしゃがみ込んでしまったときのことだった。

「ジェス！　ジェス、早まるなーっっっ！」

という少女の声が、背後から聞こえてきたのは。

それは、あり得ないはずの声だった。

この場所で聞こえるはずのない声だった。
そうとわかっていたのに、アマンシールは振り返らずにはいられなかった。
そうして、認めた。
彼の奇跡を――彼の月の葉を。
まっしぐらに、自分に向かって駆けてくる少女の姿を。

「な、なんでっっ！　なんだって、こんなところにいるんですか――――っっっ!?」
絶対にあり得ないことだと認識していたものだから、アマンシールの声はひっくり返っていた。
そして、それは相対する少女にしても同じことだった。
「そんなのっっ！　そなたが夜中なのに部屋にいないと風霊から聞いたからに決まってる！　いやな予感を覚えて、風霊たちに捜してもらったら案の定、こんな水場に来

ているし！」

水場といったところで、自分が溺れかけた池とは全然違う、小さな小川じゃありませんか――と、言いかけたアマンシールは、クランクレイアの顔を見てぎょっとした。

なぜなら彼女は、大きな紫水晶の瞳いっぱいに涙をたたえて彼を見つめていたのだ。

昔から、アマンシールはクランクレイアの涙にだけは弱かった。

卯の花の下で泣いていた姿を目にして以来、彼女が泣くと、それだけで、もう、どうしていいかわからなくなってしまうのだ。

思わずわたわたして、彼女のそばに近づき、そっとだきしめてしまう。

「頼みますから……お願いですから、どうか、泣かないでください」

「泣かせている本人が何を言う!?」

かみつくような口調で反論されて、アマンシールは思わず「は？」と問い返した。

「……なんのことです？」

そう言えば、先ほども彼女は意味不明なことを叫んではいなかっただろうか——確か、早まるなとかなんとか。

もしかしたら、ふたりの間には、広くて深い溝があるのでは……と思い至ったとき、クランクレイアがまさにそれを裏付けるようなことを言い出した。

「自覚がないのか……自覚もないまま、こんなところまで来るだなんて……そなたはやっぱり、水の乙女に魅入られてしまったんだな。だけど、大丈夫だ。わたしがついている！　そなたをむざむざ水の乙女たちの贄にはさせん！」

この段になって、さすがにアマンシールも、クランクレイアが大いなる誤解——勘違いともいう——を抱いてこの場に駆けつけたことに気づいた。

しかもタチの悪いことに、風霊たちは彼女の誤解——思いこみと呼んでもいいかもしれない——を解こうともしなかったのだ。

（いったい、どういうつもりなんだ!?）

困惑しながらも、それでも彼女の誤解だけは解いておかなければ、と思った。

自分が池に落ちた際、水の乙女と呼ばれる水霊に魅了されたなどと誤解している限

り、彼女はこの先何度も、部屋を抜け出しかねないからだ。しかもその際に用いる手段は、自分があれほどやめて欲しいと頼んだ風霊絡みのそれに違いないのだ。

危なかしいにもほどがある。

そんなことをさせるぐらいなら――。

「誤解です！」

大声で、アマンシールは言い切った。

（ああ、本当は、もう少し緊迫してない場面で披露して、それで喜んでほしかったんだけど……なあ）

とは思ったが、仕方ない。

「クランさま！　わたしがここに来たのは、断じて水の乙女に魅入られたからではありません。わたしは……これを……この『月の葉』を求めて、ここに来たのです」

静かな、静かな空間に、別種の沈黙が横たわった。

……。

「……『月の葉』……？」

「はい」
力いっぱい、アマンシールはうなずいた。
しかし、次の彼女の問いは、彼を脱力させるに充分な破壊力を持っていた。
「……誰のために？」
……鈍感なのは、アマンシールばかりではなかった……らしい。
「あなたのほかに、誰がいるというんですか!?　言っておきますがねえ！　月の葉なんて、世間じゃちょっと珍しいだけの、ただの色素まで抜けた葉脈だけ残ってる葉っぱ扱いですよ!?」
「なにを馬鹿なことを！」
すかさずクランクレイアが反論してきた。
「確かに、自然に葉脈だけが残る葉っぱは珍しくとも捜せば見つかるものだ！　しかし、月の葉は、そうしたものとは全然違うぞ!?　月の葉と、そこいらの葉っぱを一緒にするでない！」
心底憤慨（ふんがい）した様子の彼女の姿を見ていると、なんだかそれだけで報われたような気

がした。

「それなら」

と言い置き、彼は拾って間もない『月の葉』をクランクレイアに差し出した。

「綺麗な花束でも、甘いお菓子でも、可愛い小物でも、洒落た手巾でも手袋でもありませんが……あなたに一番喜んでもらいたくて、手に入れたものです。受け取っていただけますか？」

まるで考えてもいなかったことだと言わんばかりに、まずクランクレイアは紫の双眸を大きく瞠った。

それから、「本当に？」と問いかけるように、アマンシールの瞳を見つめ、次いで彼の手にある月の葉に目を落とし、そうして再び彼を見つめ――。

やがて、小さく「嬉しい」とつぶやいた。



26

長い、長い、本当に長かった——その大半は、本人たちにも自覚がなかったとはいえ——アマンシールとクランクレイアの『長すぎた春以前の季節・脱出』を、祝ってくれたのは、事情が事情なものだから、決して数は多くはなかったが、限られた友人たちは、皆心から祝福してくれた。

なかでも一番感激していたのはハーリクで、町の居酒屋でおいおいと泣きながら「良かったーっっっ！　お前ってば傍目にあからさまなのに、なんか本人だけ気づいてないっぽかったんだもん。でも相手が相手なもんだから、気づいても不幸なだけかもとか思うと、指摘もできないし……こいつ、もしかしたら一生このままかもとか思ってたから、ほんとーっっに、めでたい！」と、涙混じりに訴える始末だった。

本当にいい、愛すべき友人だと、最初の頃こそ感激していたアマンシールだったが、ハーリクが、酒が入るにつれ、どんどん過去の恥ずべき話を暴露しまくってくれたおかげで、最初に覚えた感動はほとんど跡形もなく消し飛んでしまった。

「それで、正式な婚約はいつごろになりそうなんだ？」

そう問いかけてきたのはギスカリールだ。

出会ったころから変わらぬ外見の青年は、時折ふらりと姿を消すものの、基本的にこのロスタロイドの下町に居を構えている。

「彼女が一五になったら、という方向で父たちは話を進めているようです。そのころにはわたしもちょうど王立学院を卒業してますし……」

答えたアマンシールに、ギスカリールがにやにやと笑った。

「婚約までは順調にいくだろうが、結婚にこぎ着けるのは一苦労かもしれないぞ？なにしろ彼女には、難物の保護者がふたりもくっついているからな」

誰かと尋ねるまでもない——現国王と王太子だ。

最強の障害と言えるだろう。

「脅かさないでください……殿下からはすでに、可能な限り婚約期間を長引かせてやると言われてるんですから……」

あのひとならやりかねない——どころか、本当にやる、とわかるだけに、とても冗談として笑えなかった。

「まあ、さすがに、可愛い娘や妹が、行かず後家なんて陰口をたたかれるようになる前には折れてくれるだろうよ。安心しろ」

「……ちっとも安心できません」

それまで一体何年待たされることになるのか——考えるだけで気が重くなる。

「周囲が万端お膳立てしてたにも関わらず、話が整うまで七年もかけたんだ。じっくりゆっくり愛を育んでいくのも悪くないだろう。五年や十年、過ぎてしまえば、大した長さじゃないって」

他人事だと思って、ギスカリールは無責任なことを言い放ってくれる。

「あなたと、普通の人間を一緒に考えないでください。こっちの時間は限られてるんです！」

長生きする人物はとことん長生きするとはいえ、普通の人間の寿命は六十前後だ。
五年や十年は、充分に大した時間なのだ。
と、そこまで考えたとき、アマンシールははたとあることに気づいた。
柱神の縁者であるというギスカリールの外見は、クランクレイアが生まれた当時から、ほとんど変わっていないと聞いた。
では、柱神そのひとの血を受け継ぐクランクレイアは……？
（ま、まさか）
すうっと血の気が引く思いがした。
（いやいや、彼女は出会ったころから普通に成長してるわけだし……でも、あの不思議の力のことを思うと、あり得ないとは言い切れないかもしれないし……）
もし――もしも、だ。
この先彼女の成長が、ひとよりゆっくりしたものに変わってしまったとしたら――。
いつまでも若々しい彼女をよそに、どんどん年を重ねていく自分、という恐ろしい

光景が脳裏に浮かび、アマンシールは心底ぞっとした。

いや、それ以前に、だ。

（そんなことになったら、あのふたりは絶対彼女を手放さない！　さすがは神の娘だとかなんとか噂でもなんでも流布させて、それこそ本当に可能な限り手元に置こうとするに決まってる！）

下手をすれば、一生婚約者のままということも――大障害が二代に渡っていることを考えると満更あり得ない話ではなさそうで、怖い。

そんな彼の様子に、ギスカリールが堪えきれぬようにぶぶっ、と吹き出した。

「お前、相変わらず、クラン嬢のことになると、なに考えてんのかまるわかりだな。安心しろ、おれは赤ん坊のころから、成長はゆっくりだったって話だからな。彼女がおれと同じことになる心配はいらんだろう……多分」

こちらがほっとした瞬間を見計らったとしか思えない最後の付け足しに、アマンシールは相手の確信犯的意図を見た。

「ギスカリール！」

あなたというひとは――っっっっ！

なかば本気でこぶしをふりあげた彼に、ギスカリールは笑いながら謝ってきた。

「やー、悪かった、悪かった」

全然悪いと思っていない様子で、そう言った青年は、しかし一瞬の後、アマンシールの耳元に顔を寄せ、こうささやいた。

「だが、おれ以上に年月から無縁なお方が、近々御降臨なさるらしい……」

さっ、とアマンシールの顔が強ばった。

ギスカリール以上に年月から無縁な存在など、柱神しかありえない。

しかもその降臨――柱神が元々は人間だったことを知らない多くの者は、その出現をそう表現するのだ――が間近だということは……。

次代の半身となる神宝に、何らかの変化が見られたということに外ならない。

兆しが見えてより四年弱――。

はたしてこれは、長かったのか、短かったのか。

わからぬものの、そのとき、アマンシールは運命の火蓋が切って落とされたのを感

じた。

事実、この後、時代は大きく揺れ動くことになるのだ。

久しぶりに訪れることのかなった週末の午後の、王宮での茶会は、疲れかけたアマンシールの心を潤すなによりの憩いの時となった。

「ジェス！」

満面の笑顔で迎えてくれたクランクレイアの、輝かんばかりの笑顔と、昔から変わらぬライラーナの和らかな笑顔と態度、そして淹れてもらった香草茶の優しい味わいに、彼は心からしんみりした。

なにしろ、ギスカリールから件の情報を得て以来、寝る間もなく働きづめだったのだ。

まずはそのことを父とふたりの兄に報告し、父には、すでに確定寸前にまで煮詰め

ていた次代柱神候補を、王家の養子とする懸案を、一刻も早くまとめてもらうことにした。

ただし、そうと決まっても、実家やその親族勢が黙っていないことも考え、それなら、候補に選ばれる前に養子縁組してしまえという、いささか乱暴ながら、効果的な方法が、実現するために、ファラスース、エルスース両家と、派閥に属していない能吏の間で話し合われた。

そこで問題とされたのが、新たなる柱神を見抜く『選定者』が、いったい何者であるのか、ということだった。

いまのところ、それが誰であるのかわかっていない。

それが、なによりの頭痛の種だった。

そんなこんなで、ここのところすっかり疲れはてていたのだが、婚約が内定した恋人の笑顔を見たとたん、疲れが吹っ飛ぶあたり、自分はけっこう現金なのかもしれない、とアマンシールは思った。

「疲れているようだが……大丈夫なのか？」

心配そうに、見上げてくる紫水晶の瞳が愛しくて、アマンシールは「はい」とうなずいた。

「大丈夫。皆、加減はわかってますから」

そう答えると、なぜかクランクレイアは眉宇を曇らせた。

「クランさま？」

「わたしが尋ねたのは、お前がっっ！　大丈夫なのかっっ！　ってことだったんだが」

アマンシールは大いに慌てた。

彼女の瞳が、記憶にある限りにおいて、最高に近い怒りの炎を宿していたからである。

「も、もちろん、わたしも大丈夫です」

答えてから、本当に大丈夫なことを知った。

よく、「疲れも吹き飛ぶ笑顔」と聞くが、それはあくまで比喩的な表現だとばかり思っていたのだが、そうではないのだと、初めて実感した。

なぜなら、クランクレイアが、自分を問いつめた挙げ句、「大丈夫」だと答えた瞬間、ほっとしたように息をつき、「それならいいんだ」と言って微笑んだ瞬間――。

確かに、それまでの苦労も疲労も消えうせてしまったのだから！

想うひとから向けられる好意や笑顔が、こんなにも自分に力を与えてくれるものだとは知らなかった。

だからこそ、次代柱神の交代は、なにがなんでも流血なしに遂げさせなければ、と改めて思った――この心優しい少女の笑顔を曇らせないためにも。

間違っても、彼女やフィオーンの血が流されるようなことのないよう、全身全霊の力を以て、ことを計らなければならない。

（とにかく、選定者が誰なのか調べるのが先決だけど、それに関してはファバルワース兄上と、ギスカリールさんに頼るしかないな）

神殿に多少なりとも伝のある人物はそのふたりだけなのだ。

ほかの問題なら、一番有効なのは、フィオーンを通じて、国王に尋ねてもらうことなのだが、こと柱神の交代についてだけは、神殿が王家に固く口を閉ざすことはわか

りきっているので使えない。

ディエーンを含む、少なくはない国家において、柱神の交代と前後して、王家の交代がなされたことを考えれば、それは当然のことだった。

いっそ、次兄が神官職についていてくれたら……と、ちらりと思わないでもなかったが、過去を仮定したところで無意味だった。

なにより、神学院に入学しながら、なぜ神職につかなかったのかと尋ねた際、ファバルワースがあげた理由を考えれば、到底、次兄がまっとうな神官になれたとは思えないから尚更だ。

彼はにっこり笑って「将来のための人脈作り」と答えたのだ。

つまり、はなから神官になるつもりなど皆無で、優秀な席次を保持しつづけたというわけで……本気で神官を目指して学んでいた他の人間に、もしも在学中にそのことが知れたら、月のない夜に、どこかで刺されてもおかしくはないところだった。

（まあ、人脈作りの一環だと割り切って、全虹神神殿の祈禱書丸暗記するあたり、わたしには真似できないけど……）

興味、意欲を覚えない限り、どんな教えも知識も『馬の耳に念仏』になってしまうアマンシールは、そのあたりのことは素直に次兄を尊敬している。

ちなみに、長兄に関しては、その均衡の取れた知識と度量の大きさを無条件に認めている。自覚はないが――父リュシアンドあたりは、是非自覚してくれと言いそうだが――問題児らしい自分と、その自分ですらくせ者だと思う次兄の『兄』をやっているのだ……充分に尊敬に値する。

そして、父もふたりの兄も、いま、自分とクランクレイアと現王家のために、奔走してくれている。

自分とクランクレイアのことがなければ、たとえ現王家との『三代』の問題があったとしても、きっといくらでも切り抜ける方策を見いだし、動けるに違いないひとたちが、だ。

そのことに、心底からの感謝を覚える。

だから……アマンシールは伴侶と心に決めた少女に問うたのだ。

後に真意が知られたとき、卑怯だと誹られることさえ覚悟して――ある、ひとつの

ことを。

「当代さまは……」

何も知らせず、情報だけを引き出そうとするのは、本当に卑怯な真似だ。

わかっていても、その泥水にだけはクランクレイアを引き込みたくなくて、彼は『事情を知らぬ者』そのものの態度で問いかけた。

「ここ三年以上というもの、忙しさにかまけて、当代さまをお訪ねすることもかなわずにおりましたが、いかがお過ごしなのでしょう?」

その言葉に、クランクレイアは目に見えて動揺した。

だがそれは、秘密を暴かれそうになった者の示すものではなく、不安を言い当てられた者のそれだった。

紫水晶の双眸を大きく瞠り、彼女は唇をわななかせた。

そうして、絞り出すように、一言——。

「……わからない」

と、答えた。

「わたしは……もう、三月ほども、当代さまとお会いしていない……というか、お会いできていないんだ……！」

クランクレイアの声には、隠しきれない悲痛な響きが宿っていた。

27

懐かしい夢を見ていた。

それは、彼女が初めて夫となるひとと対面したときの場面だった。

かのひとは、王国でも有数の名門の当主ながら、先の二代に渡る当主の浪費によって、経済状態の悪化した事情を抱えているひとだった。

対する自分はと言えば、爵位を金で購った父と、その父に買われるようにして嫁いだ、ディエーン開闢以来の名門であることしか取り柄のない貧乏貴族出身の母との間に生まれた娘だった。

成り上がりであることに劣等感を抱く父は、さらに名家と縁を結ぶべく、多額の援助の条件として、当時のエルスース家に、この婚姻を申し入れたのだ。

社交の場に出れば、いやでも父に関する陰口の類は耳に入ってきた。

『高貴な方々を妻や娘婿に迎えれば、ご自分もその仲間に入れるとでも思ってらっしゃるのか……さてさて、市井出身のお方の考えることはよくわからないな』

『エルスースのお方もお気の毒に……いかに母君から高貴な血を受け継がれておいでとはいえ、もう半分はあのような、始祖の血を一滴も受け継いでいない男の娘を花嫁に迎えざるを得ないとは……』

『それも、絶世とまではいかずとも、美女であればまだしも……』

『まあ、酷いことをおっしゃいますこと。人並みに可愛らしいお嬢さんではありませんか』

『確かに目も当てられぬご面相ではありませんな。そこはさすがに、母君の血というものでしょう……あの男そっくりな顔でしたら、いかに持参金を積まれても、誰も娶ろうなどとは思わなかったでしょうからな』

『いやいや、いまのエルスース家の窮状を考えますと、相手がどんな恐ろしいご面相の主であろうと、断ることはできないでしょうよ』

『そういうことなら、エルスースのお方は、まだ運がよろしかったというべきですかな。普通にお可愛らしいお嬢さんを花嫁に迎えられるわけですから』

不愉快に感じなかったといえば嘘になるし、反論したい衝動に駆られたことも一度や二度ではなかった。

確かに父は肥満体質で、顔には数え切れないぐらい吹き出物の痕が残っていて、決して見目がいいとは言えない容貌をしているし、母を買うようにして娶ったのも本当のことだ。

それでも、父は母や自分にはやさしかった。結婚当初のころこそ知らないが、自分が物心つくころには、母は確かに父と笑って話していた。

今回の、自分の縁談にしても——もちろん、名家とさらに誼を通じるという目的がなかったとは思わないが——それだけでないことも、彼女はちゃんとわかっていた。

幼いころ、父は自分を抱き上げて、「お前には、三国一の婿殿を迎えてあげような……成り上がりだのなんだのと、言われることのない立派な婿殿をな」と、よく繰り返していたからだ。

あれは、己にぶつけられた言葉の礫のもたらす痛みを、決して娘には味わわせたくないという思いから発せられたものだと思うのだ。

だから、今回の話を聞かされたときも、世間のひとたちのように、父のことを悪く思ったりはしなかった。

けれど、世の中の噂の多少を聞きかじりとはいえ知っている身として、静かな諦念を覚えたのも確かだった。

父の強引な申し出を受けたという未来の夫は、決して自分を愛してはくれないだろう――出会う前から、そう思っていた。

経済的に破綻状態にあるとはいえ、エルスース家は名門中の名門なのだ。

その誇り高い当主が、援助の代わりに押しつけられた、十人並みの娘を愛してくれるはずがない――父は、母の心を誠意でもって開かせたが、母のように美しくもない自分に、相手が興味を抱いてくれるとは思えない。

それとも、自分こそが誠意を以て、夫となるひとの心を解きほぐすために努力すべきなのだろうか――？

けれど、会ったこともない相手に対して、そうできる自信などなかった。

そして――その日。

初めて対面した婚約者は、彼女の顔を見ても、失望した様子を見せないばかりか――事前に肖像画を目にしており、心構えをしてきていた、という意地の悪い見方もできたが――嬉しそうな笑顔さえ見せたのだ。

不思議に思い、父が席を外したときに、そのことを尋ねてみたところ、相手――エルスース家当主ガラスールは、意外な答えを返してきたのだ。

「想像していた以上に可愛らしい方なので、嬉しくなったのです」

と――。

けれど、無理からぬことながら、彼女は、その言葉を素直に受け取れなかった。

「つまり、世の噂ほど見られぬ面相でなくて安堵なさったということでしょうか？」

本音を言い当てられ、さぞガラスールは気まずそうな顔になるだろうと思ったのだが――同時に、僻みもあらわなことを口にしてしまった自分自身に、嫌悪さえ覚えたのだが……正面に座る青年は、またしても意外な反応を示した。

「は？」

わけがわからないとでも言いたげな顔になったのだ。

それでも、彼女は相手の態度を信じることができなかった。

「おとぼけにならずとも結構です。わたくし、父やわたくしのことが、世間でどのように噂されているぐらいは存じておりますから」

切り込むような鋭い口調になったのは、仕方なく結ぶことになった縁談だと、双方ともにわかっているのに、表面だけを取り繕うような真似をしてほしくなかったからだ。

どうせ政略で、きっと愛してももらえない相手に、こちらの機嫌を窺うような真似はしてほしくなかった。

けれど――それこそが、彼女の誤解だったのだ。

ガラスールはこう答えたのだ。

「噂がいかに当てにならないものか、あなたは身を以てご存じのはずでしょう？　確かに、お父君と直にお会いする以前は、世間のつまらぬ風評に気を取られていたこと

は否定しません。ですが、実際にお会いしてお話しするようになったら、それらがいかに悪意で曲げられたものであったのか、すぐにわかりましたよ。お父君はご立派な方です」

そんな風に、父のことを語るひとに――少なくとも、生粋の上流階級に属する人物という意味で――彼女はそれまで会ったことがなかった。

心が、一気にガラスールに傾いていくのを感じた。

「エ、エルスース家のお方の言葉とは思えませんわ」

胸の鼓動が激しくなると同時に、声が少し上ずった。

「そうですか？」

惚けた口調で首を傾げた彼は、なにか悪戯を思いついた子供のような目をして、

「実はお父君のことが大好きになったのは理由があるんです」と小さな声でささやいてきた。

「理由？」

思わず問い返した彼女に、「そうなんです」と、ガラスールは嬉しそうに話し始め

た。

「世間では、爵位を得た上で、さらにそれ以上の権威を欲して、お父君があなたの母君を求められたという話になっているでしょう？　あれ、実は逆なんですよ」

告げられた言葉の意味が理解できず、彼女はまたしてもオウム返しに言葉を繰り返してしまった。

「逆……？」

「お父君は、あなたの母君に一目惚れなさって、それゆえにしゃかりきになって頑張られたのだそうです……爵位なしでは、れっきとした貴族令嬢であった母君との結婚は許されないから、血の涙を振り絞るような努力をなされたという話ですよ」

初耳だった。

そんなことは聞いたこともなかった。

「わたしは、その話を聞いたとき、心からお父君のことを尊敬すると同時に、そんな父と、そのひとにそこまでさせるほどに魅力的な細君との間に生まれたご令嬢は、いったいどんな方なんだろうと胸が躍りました……わたしは、本当に、あなたとお会い

したかったんです」

ガラスールの言葉は、泣きたくなるほどに嬉しく、同時に切ないものだった。

「でも……では、さぞかしがっかりなさったことでしょう？」

尋ねる形の確認の言葉を口にした彼女に、青年は首を傾げた。

「なぜです？」

「だって、わたくしは……」

決して美しいとは言えない容貌だから――。

わかっていても、口にするのは辛く、彼女は唇を噛みしめた。

そんな彼女の思いを知ってか知らずか、ガラスールは笑顔で告げた。

「あなたがご自分のことをどう考えてらっしゃるかは知りませんが、わたしの目に映るあなたは大変魅力的ですよ。あなたの瞳には、愛し愛されることを知る者だけが持つ強い光が宿っている……わたしにとって、それはなによりもかけがえのないものなのです」

外見に関して褒めるところがないから、そんなことを言うのだと――穿った見方を

することはできた。

けれど、彼の自分を見つめる眼差しに、そんな誤魔化しは一片も見いだせず、なによりすでに抱いてしまっていた好意ゆえに、彼女はその言葉を信じた。

そうして――それは、確かに信じていいことだったのだ。

幸福な、幸福な時間が流れた。五人の子供に恵まれ、その成長を見守り……穏やかな時の流れに身を任せ、年老いて子供たちに見守られるなかで息を引き取るのだと、当然のことのように信じていた……。

それがかなわぬことと知ったとき、彼女はもしかしたら、心の一部を閉ざしてしまったのかもしれない。

運命の皮肉な巡り合わせは、それだけ彼女の心を打ちのめしたのである――。

遙かな過去――ただの人間であったころの幸福な夢から醒めたとき、コーランジュ

はそばにひとの気配を感じ、一瞬目を瞠った。

警戒したわけでも、恐怖を覚えたわけでもなかった。

ここは、彼女の屋敷なのだ——彼女を慕う精霊たちが、悪意を抱いている者を、近づけるはずもない。

彼女はただ純粋に驚いていたのだ……精霊たちの呼び声にも気づけぬほど、深く眠ってしまっていた自分自身に。

気配のする方を振り返ってみると、昔なじみの顔があった。

出会ったころはほんの少年だった人物は、いまでは深い皺を刻んだ老人となっている。その身に纏う装束は高位神官にしか許されぬもの——色彩は黄。

黄神神殿最高司祭グラスパードだった。

「お休みのところ、申し訳ございません」

眠っているコーランジュのそばに近づいたことを——確かにこれが、若い男女でのことだったら大問題だ——心から謝罪するグラスパードの双眸には、大きな安堵の色があった。

なにに対する安堵なのか、言われずともわかっているコーランジュは、苦笑しつつ軽く手を振った。

「そんなに心配しなくても、簡単にぽっくり逝ったりはしませんよ。まだまだ見届けなければならないことが山積していますからね」

そう言って、彼女はわざとあくびを洩らした。

「それにしても、失敗したこと……春の気候が、ここまで眠りを誘うものだったなんて……。刻限を指定して呼び出したのは、わたくしのほうだったのに、不調法をしてしまったわ」

ごめんなさいね——と謝った彼女に、グラスパードは「いえ」と短く答えた。

歳を重ねた老神官のその声には、沈痛な響きが宿っていた。

その響きに、コーランジュはつかみ所のない不安を感じた。

直に会いたいという旨の、書状を送ってきたのはグラスパードだった。だが、ファラスース、エルスース両家が手を組み、次代選定とほぼ同時に生じる内乱を阻止するための工作に関しては、コーランジュ自身一枚噛んでいたから、てっきりその話なの

だとばかり思っていた。

王家の交代劇が、いかに多くの血を流し、国土を疲弊させるものか、身を以て知る彼女は、率先して両家の計画に協力することを決めた。二度と繰り返させたくはない歴史を押しとどめるためなら、俗世不介入という柱神の法に反してもかまわないと、彼女は心定めたのだ。

そうして、彼女は自らの立場と人脈を最大限に駆使し、神殿の上層部に働きかけてきた。神殿にしても、内乱は歓迎できぬものとして、虹神自らが定めた則に触れない限りにおいて、という条件付きで協力を約束してくれた。

次代の候補者を、公式に発表する前に、王家の養子に迎えるという、前代未聞の策さえ、神殿側は受け入れたはずだった……。

だが、グラスパードは、優れない顔色のまま、いま、コーランジュと対峙している。

「……なにか、不都合が生じたようね？」

それは、問いかけではなく確認の言葉だった。

グラスパードが深く頭を垂れた。しかし、彼は言葉を発そうとはしなかった。
「なんです？」
重ねて問うたコーランジュに、老司祭は沈鬱な表情で答えた。
「恐れながら、此度の一件……当代さまのお心に添うのは難しいか、と――」
思いがけない言葉に、コーランジュはグラスパードを凝視した。
先々代国王の庶子として生まれたグラスパードは、生母を亡くしてしばらくの間、嫉妬深い当時の正妃から隠すために、彼女の元に引き取られて暮らしたことがある。
それ以来、とぎれることなく、交誼はつづいてきた。
「それは……神殿内部の決定ですか？」
近い将来、交代することが決まった以上、柱神といえど、詳しい事情を神殿に問いただすことはできない。
だから、グラスパードには、きっぱりと答えを拒む権利があったのだが――。
老司祭は、静かにかぶりをふった。
「いいえ。神殿における問題ではありません。ですが、候補者全員を、王家の養子に

迎えることがかなわねば意味を持たぬことを考えますと、此度のことはどうにも不可能か、と……」

それは、どういうことなのか。

コーランジュは必死に記憶をたどった。

そして、たどりついた結論は――。

「……王家に、すでに叛意を抱いている家の子供が、候補に挙がっているのですね」

だとしたら、はなから無理だ。

処罰されていない以上、その家は相当に用心深く振る舞っているといっていい。

だが、そこに、さしたる深い理由も知らされず、子供を王家の養子に迎えたい――などと告げられたら、その家の者は間違いなく自分たちの叛意が見抜かれてしまったのだと思いこむに決まっている。

その場合、取るべき道はふたつにひとつ。

恭順を示すため、『人質』として、指名された子供を差し出すか、あるいは、疑いを招く覚悟で断るか――だ。

どちらにしても、その瞬間にその家の王家に向ける反感は決定的なものになってしまうだろう。

それでは、火種を作るだけだ。

「ああ……」

思わず俯き、うめいた彼女に、グラスパードはさらなる衝撃的な事実を語った。

「恐れながら……問題が生じそうな候補者は、おひとりではないのです……」

神を、運命を呪う言葉をコーランジュが発したのは、長い生涯を通して、そのときが最初で最後だった。

「なんてこと……っっ！」

短く叫んで、彼女は両手で顔を覆った。

王立学院の教師が、アマンシールの名を呼んだとき、彼はまさしく試験を受けてい

る真っ最中だった。

しかも、こまめに行われる小試験ではない。今秋の卒業にも影響の及ぶ前期試験だ。

なにごとかと思った彼に、教師は即刻帰宅――寮ではなく、ロスタロイドにおけるファラスース邸にだ――するよう告げた。

「兄君が事故に遭われ、怪我を負われたそうだ。試験は後日受け直せるよう手配するから、君はすぐに戻りなさい」

言われた瞬間、アマンシールは顔から血の気が引いた。

たいした怪我でないなら、父は寮に手紙を届けるだけですませたはずだ。大事な試験の最中に呼びつけるとは、尋常なことではない。

真っ青になった彼を気遣う教師に促されるまま、彼は学院を後にし、屋敷へと急いだ。

(事故って……いったい、どちらの兄上が……いいや、大体どんな事故だったのか……違う。違う。違う。いったい……怪我って……!?)

命に関わるような大怪我なのか――それとも……まさか、もはや手の施しようがないために、父は自分を呼んだのでは……？

頭がぐるぐるして、正常に物事を考えることもできない。

実際、このとき彼は、財布を持ち出すことさえ忘れており、学院側が用意してくれた馬車を降りるまで、そのことに気づきもしなかった。

結局迎えに出てきた家人に支払いを頼み、彼は走って屋敷に飛び込んだ。

兄の安否を思うと、気が気ではなかったのだ。

ところが――だ。

玄関に入ったとたん、アマンシールは信じられないものを見た。

兄ふたりが揃って、彼を待っていたのだ。

「兄上……？」

その、怪我ひとつない姿に、アマンシールは混乱した。

なにしろふたりの兄の内のひとりが、瀕死の重傷を負ったと信じていたのだ、無理もない。

次いで、知らせは誤りだったのだとわかって安堵した。最後に、あまりにもタチの悪すぎる嘘に、猛烈に腹が立った。

「兄上！　これはいったいどういうことですか!?」

声を荒げて非難する末弟に、しかしふたりの兄たちは、険しい表情で、短く告げた。

「応接間へ急げ。父上と、客人が待っておられる」

答えになっていない、と食い下がろうとしたアマンシールは、しかしふたりがともに漂わせる、ただならぬ気迫とも気配とも呼ぶべきものに、沈黙を余儀なくされた。

それでも「後でしっかり説明してもらいますからね」と念だけは押して、彼は言われる通り、応接間へと向かった。

客がいるということで――父ひとりなら、顔を見るなり盛大に文句を口にしたところだ――礼儀に則り、入室した彼は、客人であろう人影を、庭を一望できる窓辺に見いだした。

中肉中背のひとであるとしかわからなかった――窓から射し込む陽光のせいで、そ

のひとの顔が見えなかったのだ。
しかし、客人にとっては、逆だった。
入室してきたアマンシールに、そのひとはぶしつけなまでの視線を向けて来、ややあって呻くように「おお」と声を洩らした。
そして、そのひとは真っ直ぐに、彼に向かって歩き出した。
いささか、礼儀に反する行動だった——しかし、それ以上にアマンシールが不安を覚えたのは、父が一言も口をはさもうとしないことだった。
じわり、じわりと、言葉にできない不安が背筋を這い上がってくる。
そして、それがついに形を取ったとき、彼は耐え難い衝撃と絶望に襲われたのだ。
「……間違いございません」
目の前に立たれても、そのひとの顔はよく見えなかった。
けれど、その声だけははっきりと聞こえた。
すっ、とそのひとがアマンシールの前に膝をついた。
そして、告げた。

「ガジェストリア・アマンシール・アルス・ファラスース殿。あなたは正しく次代のディエーンの守護者となり得る資質をお持ちでいらっしゃる……そして」

ひざまずいたまま、顔を上げたそのひとと、目が合った瞬間、アマンシールはなにか見えない鎖につながれてしまったことを直感した。

「同じ資質をお持ちの方々のなかで、最も強い輝きを放ってらっしゃるあなたこそが、まず間違いなくディエーンの安寧の灯を継がれるお方となりましょう……」

それは――。

ある意味神託にも近い言葉。

次代柱神が誰であるのか、見極める役目にある『選定者』が、アマンシールこそが、次代柱神に最も相応しい人物であると、初めて口にした瞬間だった。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

『天を支える者　古(いにしえ)戀唄(こいうた)』の第三巻をお届けいたします。

今回はさほどお待たせすることなくお届けできました……が、相変わらずのていたらくぶりで申し訳ありません（泣）。

けれど、ストーリーの方は、当初の（但(ただ)し最低限の）目標には達しました。第二巻のあとがきで、「次こそロマンスあーんどドラマティック！」とか宣言しておきながら、ロマンスにさえ手が届かなかったらどうしよう、と実は執筆中、真剣に悩みました。

それというのも、主人公の某(ぼう)少年が悪いのです。

某シーンにおいて、作者はロマンティックに盛り上げるつもりだったんです！

プロットでは、その予定だったんです！

ところが、書いてる内に、少年は作者の想像を超えた大ボケぶりを披露し、素敵で甘い場面を待つばかりのはずだったヒロインは癇癪を起こし、結果的に、よくできた王子様に、月下氷人の役目をお願いすることになってしまいました。

でも、王子様も易々とは溺愛するヒロインを主人公に渡すつもりはなさそうですから、純粋にいいひととは呼べないかもしれません。

それで、です。

前回あとがきで宣言していた「ドラマティック」の方ですが……。

最後の最後にもつれこんでしまいました。

急転直下の展開！　そして次のページに「あとがき」の文字……。

「石投げられるかも」とか「いや、前からの読者さまなら、初めてのことじゃないから許してくださるかも」とか「ああ、でも慣れてらっしゃらない方は、やっぱり石投げたくなるかも……」等々、実は悩んだのですが、絶対にここまでは進めておかなけ

ればならないと思いましたので、敢えてここで切らせていただきました。

しかし、今回しみじみ思ったのは、ネタを思いつくと、際限なく――作品のバランスも忘れて――書こうとしてしまう悪癖であります。

暴走して脇道に逸れないように、プロットというものが存在しますのに、当代さまのエピソードに入ったとたん、筆――たとえです。正確には頭と指です――が暴走すること暴走すること。

「わたしは今、アマンシールとクランクレイアの話を書いてるのに、ここで延々とコーランジュさまのロマンス書いてどうするのよ!?」

と、何度自らを叱咤したことか……。

それでも暴走する筆の産物のほとんどを切り捨てては先に進むという、面倒くさい作業をしたせいで、時間が余計にかかってしまいました。

この先、同じことが起こらないという自信もない作者は、「現在でさえ、（中断中の）本編より長くなってるのに、この勢いで柱神さまストーリーが増殖したら、どっちが本編かわからなくなる……」と戦々恐々としております。もっとも、わたしの近

くには「あーら、本編には数字を、番外編にはサブタイトルをつければいいだけのことじゃなーい？」とささやく友人がおりますので、未来は霧に包まれたままです。是非、読者さまのリクエストを知りたいところです。よろしくお願いします。

最後に、またしてもご迷惑をおかけしてしまった関係者の方々と、美しいイラストを描いてくださった明咲トウルさまに、心からの感謝を捧げさせていただきます。

そしてこの本を手に取ってくださったすべての方との、再会を願いつつ――。

平成一八年　年始

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
古戀唄（いにしえうた） 3

COBALT-SERIES

2006年2月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　片山道雄
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2006　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

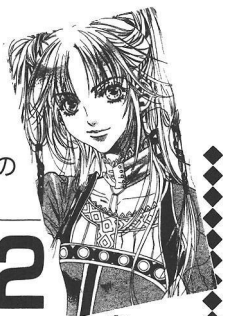
ISBN4-08-600729-0 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル



天を支える者

行儀見習いのナルレイシアは王都のお屋敷で働くことになって!?

天を支える者2

ナルレイシアは次代の柱神を見極める選定者に選ばれ王宮に連れてこられて…!?



天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）

「女神の娘」と呼ばれる王女と少年の遠い昔の運命の恋をつづった番外編。

天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）2

周囲の嫌がらせに抵抗しながら、少年ガジェスと王女クランは絆を深めていくが…。

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱



〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

9784086007290

ISBN4-08-600729-0

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫